慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	菅野武雄「最後の手記」(二) : 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想
Sub Title	"Last notes" by Takeo Sugano(2) : the life and thoughts of a second-generation Japanese-American who became "Japanese" in Japan.
Author	柳田, 利夫(Yanagida, Toshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	2013
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.82, No.3 (2013. 9) ,p.127(363)- 170(406)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	史料紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20130900-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史料紹介

菅野武雄「最後の手記」（二）

――日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想――

柳田利夫

本稿では、一九四〇（昭和一五）年一二月一日、横浜に上陸した菅野武雄が日本での二度目の生活を始めてから、翌一九四一（昭和一六）年八月末に湿性肋膜炎を患い、武蔵野療園で療養生活を送るようになる一〇月中旬までの約十ヶ月に関わる手記を翻刻する。

この間、北米からの父親の一時帰国、早稲田大学での学生生活などにかかわる記事が続くが、中心となるのは、七月の始めに偶然の機会に手にしたビラに惹かれ「御嶽山全国合同合宿」に参加したことから、急速に「日本学生協会」の運動に没入するようになってゆく経緯と、学生運動の説明に係わる記述であり、量的にも質的にも今回翻刻紹介する手記の大部分をしめているものである。

既に前稿で述べた様に[1]、本手記は、一九四三（昭和一八）年一〇月の文系学生に対する徴兵猶予措置停止を受けて書き始められたもので、菅野にとっては既に三年近く前の出来事を振り返り、再解釈しつつ書き連ねていったものであるという点には十分な注意が必要である。早稲田での講義や学生生活に対する批判的な記述も、「日本学生協会」の運動に深く関わるようになってからの視点で描かれていることを加味して読み取るべきであろう。以下、本手記の記述の理解を助ける範囲で、この時期の菅野の活動を「日記抄」など他の史料で適宜補いつつ、ごく簡単にまとめておく。なお、個々の固有名詞、事実関係、背景などについては、翻刻に付した注記を参考にしていただきたい。

一二月一日、横浜に上陸した菅野は、その日は横浜の大島屋に宿泊し、翌日に兄が早稲田在学中に過ごした桑野寮を訪ね、三日から同寮に移っている。しかし、一二日には、早稲田大学入学をめざし一人で勉強に集中するため、江古田にあった八千代荘で下宿生活を始める。二月には「下宿屋に孤独の身を横へて、終日考へにふけって居た。無味乾燥なる下宿屋の生活にはこり」（「日記抄」）ながらも勉強を続け、四月一〇日に無事早稲田大学政経学部の編入試験に合格。二〇日には再び桑野寮に戻り、その後八月二三日に「日本学生協会」の学生寮である井の頭の正大寮に移るまでの四ヶ月を、「同郷」の安積中学校出身者とともに過ごしている。

早稲田大学では、後に菅野の批判の対象となる政治学教授の内田繁隆が主宰する政経攻究会と自動車部とに所属し、それまでの福島時代の親族・知人に加えて新しい友人との交際も始まり、就中桑野寮における「同郷」の学生達との交流を深めつつ、希望を持って大学生活を開始している。新年早々に一時帰国していた父が北米に戻ることになった五月末には、帰国直前の父とともに江ノ島、鎌倉へと旅をするなど、穏やかな学生生活を重ねている様子もうかがえる。しかし、前稿で紹介した様に、北米における就労と学生生活の両立という現実的な生活実践を通じて、排日運動や日系人への偏見と差別といった厳しい体験を重ね、二世としてあるべき姿と現実との間で煩悶を重ねて来ていた菅野は、早稲田大学での観念論的な「空虚な講義」に疑問を感じてゆくようになる。他方、北米における体験から、日米問題の背後にユダヤの国際的な陰謀があると考えることにより、現実と自らの位置づけの間の大きな隔たりに対する彼なりの合理化をはかっていた菅野は、体験に基づく確信を持って、早稲田の学友筒井隆とともに六月には「早稲田大学猶太問題研究会」を設立し、入学の相談にのってもらった同大学の中島学生課長を会長に仰ぎ活動を開始するなど、日米関係の緊張が高まる中で、北米での体験から獲得した実践的な知識と、かけ声だけの総力戦体制下の日本での生活や大学での観念的な講義との狭間で、次第に焦燥感を深めていったようである。

夏期休暇を前に、七月一日から四日にかけて実施された軽井沢における野外演習（軍事教練）から戻った菅野は、「日本学生協会」主催による「御嶽山全国合宿」のビラを手にし、「日本学生協会」について全く知識のないまま、一九日から五泊六日の合宿に参加することを決

意する。御嶽合宿では、混乱と失望の中で一時は途中で合宿を離れることを考えながらも、それまでの自分の迷い、不安、葛藤を新たに合理化できる場を次第に見いだしていったようで、結局最終日まで合宿に留まることになった。合宿から戻った菅野は、二日後の二六日には合宿時に所属していた第四班の仲間との再会を果たし、「新宿・渋谷にて絶叫」し、翌日、「日本学生協会」の学生寮である井の頭正大寮を訪れた。

この手記の中では全く言及されていないが、菅野は合宿参加者の「再会の日」に予定されていた八月一日の前日の七月三一日、「米大使館に行きて、米国籍離脱の手続を」行い、「真の日本人になれり」と「日記抄」に記している。当時日本に居住していた他の多くの日系二世が、二重国籍のまま兵役に就き国籍を剥奪されたのとは事情を異にする。合宿の友人達との「再会の日」における、「真の日本人」になった菅野の高揚感は、本手記に書き留められている通りである。合宿第四班の班長で、直接菅野の指導に当たった早稲田大学の先輩大林善郎、副班長であった東京外国語学校の額賀強三らとは、その後正大寮での寮生活を続ける中で深い信頼関係を築いてゆくことになる。現実的な生活を変える力を与えてくれない大学の講義から、日本学生協会の集団合宿、整列行進、御製拝誦、グループ討論、そして高声咆哮、絶叫などを通じて「真の友」を得、机上の空論ではない文字通りの「運動」を体験した菅野は、「しきしまのみち」の実践については困難と当惑とを感じながらも、学生による思想運動に強く惹かれてゆく。

その後、本宮に帰省した菅野は八月七日の都下学生協会代表委員会結成式に参加するため上京、会場である松陰神社に一番乗りし、「日本学生協会」の機関紙『新指導者』で固有名詞入りで紹介されている。その後一度本宮に戻るが、一三日には再度上京し、正大寮で開催された都下代表委員会研究会に駆けつけるなど、急速に協会の活動に深入りして行き、協会主催による「世界観大学」のリーフレット配りに神田、新宿、中野などで奔走し、徐々に体調を崩してゆく。一七日から二〇日には小金井浴恩館での合宿にも参加し、二三日には終に桑野寮を引き払い正大寮へと移り、「日本学生協会」の連絡部員として、炎天下リーフレット配りを続けている。しかし、肉体的な疲労が重なり、ついに二九日の世界観大学の講座中に倒れ、三一日肋膜炎との診断を受け、九月四日から協会の先輩達が療養生活を送っていた武蔵野療園

での生活を余儀なくされることになる。

晩年の菅野は、何度か自伝風の短い記録を書き残しているが、青年期の彼にとって極めて大きな思想的な展開点であったと想像される「日本学生協会」の運動への関与についての言及をそこに見る事はできない。終戦後間もない一九四七年三月に菅野と結ばれ、一九九四年シカゴで彼の最期を看取るまで五〇年近く連れ添った妻の昭子でさえ、菅野がこういった運動にかかわっていたことはおろか、彼が終生忘れることはない「同信の友」と手記の中で書き記している友人達について、菅野からその名前すら聞いたことはなかったという。菅野が、日本で生まれた三人の子供達に、それぞれ、誠、道（子）、渡と名付けたことについても、菅野のナイーブな日本を愛する心からと、深く考えることもなかったという。彼が若き日の高揚した想いを子供たちの名前に込めたのかどうか、今となっては知るよしもないが、本手記が物語っている菅野の「日本学生協会」の運動への没頭と、その事実を最晩年に至る迄一人心の中に秘めて生活して来た菅野の戦後史を、この手記を読み解いてゆく作業を重ねることから考えてみたいと思う。それはまた、日系二世の特殊な事例という枠を越え、戦争を挟む昭和という時代を生きたごく普通の人々の意識を考える上でも、少なからざる示唆を与えてくれるように思う。

なお、「日本学生協会」については、竹内洋・佐藤卓己『日本主義的教養の時代　大学批判の古層』（柏書房、二〇〇六年）や井上義和『日本主義と東京大学　昭和期学生思想運動の系譜』（柏書房、二〇〇八年）によってその運動について詳細に分析、検討が加えられ、井上義和・打越孝明・占部賢志『日本主義的学生思想運動資料集成Ⅰ』（柏書房、二〇〇七年）、『日本主義的学生思想運動資料集成Ⅱ』（柏書房、二〇〇八年）などの刊行により、多くの関連資料が体系的に紹介されてきている。それらの研究業績により、同運動の概要、社会的・思想的背景、成立から自主的な「解散」に至る迄の過程や、同協会の講演会で講師役を勤め、機関紙への論考執筆に活躍していた「一高昭信会」、「東大精神科学研究会」出身の中枢部をしめていたメンバーなどについては、かなり具体的な姿が明らかにされて来ている。その一方で、運動の中心である正大寮や東京、あるいは地方で学生運動を下から支えていった菅野のような、おそらく数の上では大多数を占めていたと思われる私大・専門学校を中

心とする一般学生については、あまり関心が払われてきていないように思われる。

後に紹介することになるが、菅野は運動の目指している方向性そのものに対して疑いを抱くことはなかったものの、次第に、帝大出身の学生運動幹部の抱く「観念的自己満足優越感」に運動の限界を直感してゆくようになってゆく。また、学生運動の本拠地たる正大寮に生活してゆくなかで、「官学に対する私学者の冷遇」を実感するようになる。こういった菅野の「理解」が妥当なものであるかどうかの判断は暫く措くとしても、菅野の同運動への関わり方を通して、エリート学生による体制（大学・政治）批判、日本主義学生思想運動という一枚岩的な枠組みに収斂できない、学生内部での階層化の進展と、それぞれの知識層におけるアイデンティティ生成の具体的な事例が、日系二世であることから、本手記ではより見えやすい形で提示されているように思われる。

講演会、講座などにおいて常に固有名詞をもって発言し、事実上、機関紙への執筆をほぼ独占していった帝大出身者、とりわけ「一高昭信会」、「東大精神科学研究会」出身者に対して、現実の運動の中で数の上で大多数を占めていた一般学生による同運動の受け止められ方を考える上で、本手記は極めて示唆に富む史料であるということができよう。また、日系二世としての菅野自身の二つの国にまたがる実生活における体験が、こういった観察を可能にさせた面も少なくなったと考えられる。

〈本文〉

菅野による言及の有無に拘わらず、他の著作からの引用部分については、翻刻者が《　》で囲んだ。また、適宜、句読点、改行を施す他、旧字は原則として当用漢字に改めた。

【p.63】

第七章　初の東京生活早稲田大学時代入学

次いで、早大政経学部政治科に入学、大学生として一歩を踏み出したのであるが、親類縁者友人関係のもの東京に全くなく、兄の早大通学時代居った桑野寮(2)に漸く安住の地を求め、相当の苦難を舐めた事は都会生活に馴れぬ余にとっては当然のことであったであらうが、下宿生活に於いて始めて人間的生活にふれる事が出来たと云ふも過言ではなからう。我々の外国に於ける生活其のものは、略式とも言へるのである。始めは永住は予側（ママ）し

【p.64】難く、子女を得て始めて半永住的生活となり、子女の生長と共に漸く永住を志ざす移民的生活に於いては、日常生活に於ける安定性を求める事は仲々困難なる事であったのである。

東京に於ける初めの数ヶ月は夢の如きものであった。上陸後の新年十七年(六)一月一日早朝、宮城に、靖国神神(ママ)、明治神宮に参拝致し、皇国臣民として異郷に迎へた新年とは又格別、体内に溢れる喜びは禁じ得なかったのである。同月六日、父がアメリカ依り帰国致し、同年六月(五)三十一日再渡航する間(3)、半年の間同じ地に住【p.65】む事を得た事、共に東京見物をして歩きし事、余にとっては生涯の想ひでゞあり、将又最後の別離であったのであらうか。父帰るの数ヶ月にして大東亜戦争勃発致し、遂に今日に至る迄一片の通信も手にする事を得ず、横浜出帆当日に於ける年老いたる父の御顔、言ひ知れぬ哀傷の別離こそ永遠の別れなるか、只神のみ念んずるのである。

五年振りに会ふ朋友は、皆国家の干城に第一線に銃をとり、将又学成り巣立って行く人多き仲(ママ)に再度学園生活に入る余は、入学の喜び依りも【p.66】学園生活に欲浴する皇恩と、又、亡き戦学友(トモ)に対する自責にかられる事は屡々あった。海外在住の為在外徴集延期の恩典に浴し、今又在学徴集延期猶予の恩典に浴し、只々皇恩の有難さに感涙泣するのであった。今こそ我々学徒の本分を尽すべく邁進せねばならぬ事を自覚すると共に、血気の憂憤の情絶(ママ)え兼ね、幾度か国内の状勢を自分自ら体験しつゝある戦時下に於ける学園生活を反省しては、憤慨(ママ)せざるを得なかった事を繰返すのであった。アメリカに於ける体験的【p.67】信念の学は何等役立たづ、単なる観念的イデオロギの弄び、学園生活の日を送れば送る程、其の内容を知れば知る程、深所を極めれば極める程矛盾する事多く、上陸当時に見た緊張感(4)は単なる外面的であり、空虚な学生生活、信和友情の欠けた無統一な学園生活、五年間の夢にもいだいて居た大学生活を現実に見て、失望、落胆する事が多かったのである。伝統を誇る早大政経学会(5)に於ける内田教授(6)の講義は、最初は希待(ママ)を持って聴講する事に努めたのであるが、余には机上【p.68】の論としての観念的な理論にはどうしても興味を持つ事が出来なかった。否反発を禁じ得なかったのである。

六月、政治科クラス会ありて、始めて自己紹介依り懇親の盃を交したのであるが、余は生れて盃を手にしたる事なく、始めて二十有三にして友情溢ふる思ひに祝盃を傾けたるは一学友ありての所以である。香川の生める快

男子筒井隆なる学友、語るに猶太問題の重要性を力説したのである。共感協共鳴共に研究せん事を約し、茲に【p.69】直ちに実行手段に移り、六月六日、早稲田大学猶太問題研究会を設立したのであった。これこそ我が国高専大学に於ける唯一の研究団体と信んずるものである。[7]この問題よりそなくしては今後に於ける世界の諸問題を論んずる事を得ざる場合多くなるを予期し、余の体験を通じて確信して居たのである。然し、猶太人問題を口にするものは誇大妄想狂か、或ひは又敵の宣伝に乗ぜられて居る迷信的存在として問題にされなかったのが当時に於ける一般的学生社会人の思潮であ【p.70】ったのである。其れ故、我々の研究団体の研究も仲々徹底せず、苦るしい闘ひを続けて居たのであった。

七月初旬、軽井沢に於ける野外演習を終へ帰校した時、[8]早大裏面問(ママ)依り手にした一枚の合同合宿に関する舎宿具ビラ[9]をたまたま読む事に依って、余の人生観、世界観に観関する一大転換期を見た事は、余の思想生活、精神生活、将又国民生としての精神生活を通じて偉大なる廻転を示して行った事は事実である。其して又、従来に於ける自己の信念、体験に対して統一的進路を与へ、苦悶【p.71】の中から必死の勢を以って起ち上る事が出来た事も、見逃し得ない事実なのである。

第八章　日本世界観

第一節　武州御嶽合宿

昭和十三年、近衛内閣に依って提唱されたる国民精神総動員も次第に立枯れの姿となり、茲反って其の弱体化を暴露されつゝあって、国民の精神生活も何等支那事変下の聖戦提唱にも係らず沈滞し勝であった事は、我が戦力上、戦争完【p.72】遂の為には大いに意義ある事である。其れに共ない、観念的なるポスター、ビラー標語の専(ママ)伝は国内に充満しつゝも、何等国民の精神生活には重大なる意義は与へず、反ってインテリ層にとっては、『一億一心』、『臣道実践』、『大政翼賛』政治制的言葉も翼賛会の指導標語にとゞまり、政治力の危機を叫ばれて居た事は寧ろ戦慄すべき事実であり、我々にとって最も関心を持たざるを得なかった事は当然たる事実であると信ずるのである。戦争は益々深刻の度【p.73】を加へ、声なき英霊の帝都へ迎る日、一日として見る事ざる日なきの四年後の今日、国内体制の強力化は政府自身の意図にあるとして論ぜざるも、その　大君居はす帝都市民、否有暇(ママ)的存在たる資本家、為政者、教育家は勿論、名与(ママ)

ある徴用令に依って召されたる一般工員、女工員、然して又国民の指導的立場にあるべき学生等の生活こそ、最も憂慮すべき事体にあった事は余をして真に悲しませ、且憤慨させたのであった。街角には、国民精神生活と心理的に統一的関連性なきポスターは其の数【p.74】は日々に増加しつゝあるも、人々にとつては単な指導者にとっては単なる宣伝以外に力なきを教へるのみであり、一般人にとっては諧謔の意味に解され、インテリー、学生に於いては反って野卑的に解されて居った事は考へねばならぬ問題であったのである。『贅沢は敵だ』、『何がなんでもやり抜くぞ』、『とんとんとんからりと隣組』、『一億一心日の丸玉だ』、かゝる『米英的存在』、『非国民』、かゝる言葉の低調さと共に、我々は如何に其の真なる意味を解するに困難さを感じて居たかは、全く精神的疲労と其の無意味さに痛歎せざるを得なかったのである。

『撃ちてし止まむ』はあらゆる個所【p.75】に見られる様になった今日に於いて

十有二月云々、皇師遂撃長髄彦云々。意欲窮誅乃為御謡之曰

瑞々し久米の子らが、粟生には、香韮一茎、そねがもとそ根芽つなぎて撃ちてしやまむ

又謡之曰

瑞々し来目の子らが、垣本に植えし薑くちひゞく、我はわすれず、撃ちてしやまむ

の神武天皇御東征の折、賊を御にくしみ遊ばされての御決意の程を御拝察致す事の御製と共に拝み奉り、恐れ多い事乍ら、其の御歌ゆ大御言葉を商標に【p.76】用ひ居る事に対し、指導方針の徹底せざるを嘆かざるを得なかったのである。

時恰も昭和十六年七月十九日依り二十五日迄、大成翼興亜修練合同合宿[10]の行はれた事は、余をして興味をもたせた事は止むを得ぬ事であったと思ふのである。

軍部輸送の関係上、初期の合宿地たる京都比叡山を変じて、武州御嶽に若人二百数十名を集ひ、一週間起居を共にし、思ひの侭絶叫し、共感し、且又反駁し会つた事は、当然人生観、世界観、思想問題に其の苦悶打開の為及んで行った事は、真剣なる学徒としては当然の事と思はれるのである。[11]

【p.77】

余は当時、帰国業未だ七ヶ月余りの事とて、人生観、世界観に対す学術的、体験的価値判断を下すべき力もな

く、早稲田学徒として血気に燃え、舎宿猶太問題に関する書籍を十数冊持参して行った事は、余をして自論を強調する意志依り発したものであったと思はれるのである。

全体会議武州御嶽神社の神霊の地、森林鬱蒼たる中に存在する一小落落たる合宿地に全体会議は開かれたのである。

余は先づ立ち上って、合宿に来た所来、在米生活の一端、現在国内に於ける自由主義、合理主義、金権主義等の思想的混乱に依る国民の精神生活の頽廃、学生生活の無意義、学徒の無気力について真に我々は血気すべき秋なりと思ふが侭に【p.78】所信を述べたのであった。次々と学徒生は起ち上って絶叫して行くのであった。真に国を憂へる者、憂国の志士、文化の戦士こそこゝに見出す事を得たのである。だが然し、果してかゝる全体的意志を全一的に統一出来るであらうか。こゝに大きな凝問がをきて来たのである。

此の合宿の主催者は、学生協会たる事を始めて知ったのはこの時である。その前進が東大精神科学研究会たる事を知ったのもこの時である。そして協会の出版書籍、雑誌『学生生活』、『新指導者』を手にしたのもこの時であった。其れ以前この団体については何等の知識がなかったのである。[12]其研究所所員[13]の言ふ事は余にとって新しい事のみであった。

【p.79】

国民宗教儀礼としての『御製拝誦』も余にとっては実感出来なかったのである。『拝誦』についての感想、それも共感すると言ふ依りは寧ろ始めての験験のみであった。

次第に余の気持に強い反駁を感んじて行ったのである。

御制拝誦としての国民の宗教儀礼の厳守は、余にとっては真新しい生命力を与へてくれたのであった。然し、果して彼等の言ふ「直接体験の直諚」、「永久国家生命への没入」、「大御心への随順意志」、「現代教育改革」、「精神的交流」が果して現在実に具現出来得べきか。余は三日、四日、合宿の日経過と共に益々混乱し、苦悶の度は加はるのみであった。体験依り来る確信に生きる自分にとって、依り厳格なる心理的分析依る来る価【p.80】値判断は未だ余にとっては未知なるものであった。しきしまの道の創作、余にとって生命的表現は歌にならなかった。否言葉に表現する事が出来なかった。観念的な弁証法に対し、余自身が弁証法の域依り脱する事を得だ、未

だ尚内田教授の東亜協同体論を説いて得々として居た事は大森大林班長[14]、額賀副班長[15]の言葉に依って次第に明析となって行ったのである。だが、余は飽く迄も目的に対する手段の相対性を主張して止まなかった事は、目的と手段と[ママ]との価値判断、即ち、具体道[ママ]には自己の絶対性を確信出来なかった事は事に於いて始めて救はれて【p.81】行ったのである。

政治上依り見たる東亜連盟、東亜協同体論者の意志の方向こそ、最も危機であったのである。今こそ真の皇国臣民たる事の確信以外、政治、経済、外交等の諸問題の解決されざる事を知ったのである。亜細亜を指導する者こそ、我が日本である。だが果して其の指導性の自覚の実体を国体の信に居き、神州不滅の覚確信依り強調し得る者、惟か詔書必謹の御神勅のまにまに永久国家生命に生き得る者果して幾何ぞや。

余の迷夢は確然とされたるのである。徒らなる私的悲憤慷慨依り発したる私情、階級意識依り発したる怨嗟、売名的志士こそ、最も国家百年の大体大[ママ]系を誤る最【p.82】も恐るべき存在たる事を知ったのである。国際至上説を説[ママ]へるもの、国際連盟絶対性を説[ママ]へる輩、観念的なる自由平等博愛を説[ママ]へる自由人こそ売国的存在たる事なのである。

国体の信こそ、御神勅を奉戴する詔書必謹の名もなき民の悲願の中に存在するのである。御製拝誦なくして、真の大御心を戴き奉る事が出来得ませうかようか。再び余は悲しまねばならなかったのである。単なる教育、文字の学に小学依り中学を通じて十幾年の輸入の学、又形式的なる修身教育に依ってまどはされ来たった。時代の悲劇【p.83】は今こそ打破せねばならなかったのである。概念の打破と叫ばれた田所所員[16]の言葉こそ、始めて理解され来たったのである。思想の混乱こそ最も生命的苦痛である。四ヶ日にして合宿地依り下山を志した余にとって、始めて救はれた気持となったのである。余の学問には、真の意味に於ける価値判断、批判説破の能思想的根拠が欠けて居つたのである。救はれた時の喜こびこそ、余の生命への観[ママ]喜であった。余の生命は再び躍動し始めたのである。苦悶依り観[ママ]喜、観[ママ]喜の世界こそ開かれたのであった。

［欄外］第二説[ママ]　日本学生協会の思想運動

《しきしまの道こそ現実生活の直接経験依り発したる具体的表現であり、日本精神の系譜、伝統があるのであ

る。

新めて、古事記、万葉の古書を繙とき、聖徳太子の御悲願、楠子父子の狐忠、【p.84】山鹿素行の忠朝事実を聞くとき、松田松陰先生始め、幕末に於ける久坂、高杉、南州の真勤皇の流れにこそ、副島、井上、松陰悠久三千年に及ぶ国家生命の脈々たる一貫の思想を実感出来るのである。

今こそ、かしこくも陛下御自身の直接御体験たるしきしまの道、御製拝誦を国民的宗教として厳守する以外事及び大御心をその侭に奉拝み奉る事の意義の重大意義を痛感すべきであるのである。

霊元天皇御製

寄道祝

あふげなほわが国中にありとなる道のはじめのやまと言の葉【p.85】

「やまと言の葉」の道、即ちしきしまの道が、あらゆる道の第一であることを徳川氏専横の世に諭させ給ふたのであった。

御水尾天皇御製

寄書述懐

ひらけなほ文の道こそいにしへにかへらむあとは今も残らめ

霊元天皇御製

寄書述懐

敷島のこの道のみやいにしへにかへるしるべも猶のこすらむ

御水尾天皇の御遺誡では、敬神としきしまの道の修練と柔軟なるべきことが眼目になってゐる。朝廷を中心として公卿の間に国学が盛になり、その気運は次第に民間に伝はって、契沖以後の国学の興隆となり、憂国の志気が動き始めたのであった。神代より伝承し給ひ【p.86】し御叡智よりして百年、二百年の後を待ちたまひしことは、畏くも又有難いことである。換言すれば、すでに三百年以前に学術教育の改革の原理と具体的な方法を示し給ふたのである。松陰先生も華夷の弁（日本と外国の区別）と本末を正すことがすべての事の本といはれたが、古は復り、君臣の大義を明にすることが教学の根本であることは、昔も今も変らない。しきしまの道は単なる文学の一部門ではもなければ、単なる道徳と宗でもない。道徳と宗教（神ながらの道）即ち皇国の道がまたが一体となった綜合的精神の道、即ち皇国の道がまたその道の至純な言葉における表現がしきしまの道と叫ばれるのであ

る。

明治天皇御製

寄道述懐

ふむことのなどかたからむ早くより神のひらきし敷島の道

【p.87】

この御製を心をこめてくりかへし拝誦するのである。

記紀は、「帝記」即ち皇室の歴史を中心とし、「旧辞」即ちもろもろの部族の伝承を厳密に検討して撰述せられた。皇統を無窮に伝へ、且つ紹かむと切に念じたまひつゝ、神州の生命をその心髄において永久に護り給ふ列聖と、列聖に忠誠を致し来った臣民との君民一体の中に国史が成立する。その君民一体の「感応相称」は、最も真実にしきしまの道に現はれてゐる。大君に唱和しまつることが、われ等の祖先のしきしまの道の一貫する伝統である。万葉の人麿、赤人、家持又防人、源実頼、吉野の忠臣、幕末維新の志士たちは臣民の側にしきしまの道の本流は流れてきた。

世界無比の国体は世界無比の文化伝統なくしてはない。国史と国体と民族文化の中心は皇室文化である。そして、その皇室文化の中心は列聖のしきしまの道である。

【p.88】

御白河法皇（ママ）は歌の道について

みなこれあめつちをうごかし、あらぶるかみをなごめ、国ををさめ民をめぐむよたたてとす

とその信を示し給ふた。この御精神は、それ以後の列聖の連綿と承け給ふ所となった。御鳥羽上皇（ママ）、花園天皇、御陽成天皇（ママ）に同じやうなみ言葉を拝する。即ち、「まつりごと」－神ながらの道と治国愛民の道との一如－の中心として、しきしまの道の重大性を諭し給ふのである。

寄道慶賀

万代ののどかなるにも言の葉のみちこそ国のはじめなりけり

と霊元天皇は教誡し給ふ所があったのである。

朝権の恢弘をひたすら念じ給ひし御後鳥羽上皇は、皇室七百年のしきしまの道の基礎を確立し給ふた。言ひ換へると、鋭意しきしまの道を践み給ひし以後の列聖は、孝明天皇に至るまで皇政復古の御悲願を伝承し給ふたのである。【p.89】それは何より先づ、列聖のしきしまの道に示し給ふ所である。》（所員　房内幸成氏[17]の国史の心髄としきしまの道に依る[18]）

御水尾天皇こゝに更めて祖国礼拝国民宗教経典明治天皇

御集拝誦宣言の一端を延用（ママ）し、その意義を述べたいと思ふのである。

《前略―「われら明治の御代にはぐゝまれ大正の御代に国民の責務を分担するもの、如何なる精神原理及び思想信仰によって各個人及び全国民生活をみちびくべきか。われらは信ず、われらはわれらの祖国日本を礼拝すべしと。われらは信ず、祖国日本の精神はかしこくも、明治天皇の大御心にすべをさめしめられたりと。われらは信ず、明治天皇の大御心は『明治天皇御集』に表現せさせられたりと。かしこくもわれら日本国民は『明治天皇御集』を拝誦しつゝ、明治天皇の大御言をさながらにいただきまつるのである。

【p.90】

申すもかしこかれども、明治天皇はたふとき大御身にましまして、祖国日本のために大御身を捧げつくさせ給ひて神あがりましましたのである。また祖国日本のためにその身をさゝげたりしもの、ま心はみな、明治天皇の大御心にすべをさめしめられたた（衍）のである。われらは『明治天皇御集』を拝誦しつゝ、かくのごとしとしぬびまつるのである。

われらは祖国日本を礼拝し「明治天皇御集」を拝誦しまつりてすゝまむとするのである。唯一生命のゆくべき一すじのみちをゆき、全国民にとっての同じき祖国日本をまもりて進まむとするのである。世界のいたりとゞまるところにはたらかむとするわれらはらからの生命の血脈、祖国日本をわれらはともにまもりて進まむとするのである。

世界文化史上のまた世界現勢に於ける日本は日本民族団体であり、東洋文明の伝統及び理想の現実的把持者としての自立国家であり、また対照補足せらるべき東西洋文明の集中地点である。われらの祖国日本はその分派としてアメリカ【p.91】をふくむヨウロツパ（ママ）文化単位と対立するところのアジア文化の現実的総摂把持者としての自立国家である。祖国日本はすでに確立せられたる世界文化単位であり、全ヨウヨツパ（ママ）統一の過程にある諸国家とは異りたる開展階次にあるものであって、普遍的概念としての国家ではなく、まことにはたゞ「日本」とのみよぶべきである。故にわれら日本国民にとっては「日本」は「世界」であり、「人生」である。「日本」はわれらの内心にいくるところの「宇宙」であり「永久生命」であり、「信順意志」である。そは祖国日本を防護せむとする実行意志であり、「日本は滅びず」と信ずる一向

専念の信仰である。

故にわれらは信ず、全国民はいまひとしく「祖国日本」を礼拝し、「明治天皇御集」を拝誦しまつるべしと。これまことに明治天皇の大きみめぐみのもとに生けるわれら国民のかなしきねがひなりと。【p.92】われらはこゝにこの信を告白宣言せんとするのである。（大正十二年[19]）》

茲に於いて祖国永久生命防護の為没入すべく、始めて心から留魂文鈔（昭和十六年日本学生協発行[20]）を読む事が出来たのであった。

松吉田松陰先生の最後の遺書とも云ふべき留魂録を読む者涙せざるもあらんや、ましてや、

身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留置まし大和魂

二十一回猛士

と記し、かきつけ終りて後、

討たれたる吾をあはれと見む人は君をあがめて夷拂へよ

七たひも生かへりつゝ夷をそ攘はむこゝろ吾忘れめ

【p.93】

かゝる憂殉国の志士に殉ずるこそ、今我等に残された唯一の道にあらざるや。余は決然として悟るところあり。心から、我が神州不滅の確信をしきしまの道に表現する事が出来たのである。

三井甲之先生の

益良夫の悲しき命つみかさねつみかさね守る大和島根を

友と共に心から唱和するのであった。

学術改革、思想改革こそ我々学徒にとって最も急務を用する使命なのであるものである。今尚無確信、無信念の欧米亜そして然して現代日本の危機を齎したものが、各方面の無連絡分科の上に立脚した自由主義、個体主義であったやうに、学校教育の欠陥もまたその個人主義教育思想とそれに立脚した個人主義的制度である。これ【p.94】が改革されねばならぬ。今日の学生には忠義といふことがわからなくなってゐる。その原因も、個人主義人生観の徹底的浸潤にあるので、今日の流行日本主義者が凡て個人主義的道義観にその日本主義の哲学的基礎をおいてゐることが、改革に対する何らのモテイーブにならずにかへって反発されてしまふ理由である。個人主義的道義観や英雄主義に基いた日本主義とか、忠義の理論などといふものはウソであるからである。かういふ現代青年の上になげかけられたゐる網の目のやうに細かい

虚妄の幕を、どうしてきり開くかと云ふことが現代国民の凡てに課せられた任務なのである。

人間の行動と生活との一切を支配する思想精神の問題が軽視されてゐる。人間生活命そのもの、領域とも言はるべきところが腐蝕されながら、なほ皇道をとき忠節を論ずる。これ以上の背理はない。学生生活の欠陥もこの根本問題【p.95】から正されぬ(ママ)ばならぬのである。この困難な問題が如何なる方法によって可能であるか、こゝに学術維新、思想改革の重大意義が存するのである。[21]

かくして余の人生観、世界観は合宿を通じて、日夜のはげしい訓練、質疑応答、御製拝誦、しきしまの道の創作、所員の講議(ママ)、輪読を通じて確立されて行ったのである。だが此の日本学生協会は果して如何なる団体なのであるか、これに対して次第に学生協会依り出版されたるパンフレット雑誌を通じて明白となって来たのである。

第三節　由本黒上正一郎氏大兄

《昭和三年日本インテリー、学生の総赤化の兆しがあった当時、第一高等【p.96】学校の中に数名の若き生徒がマルキシズム撲滅のために決死的な日本歴史の研究に従事してゐた。その指導者が徳島県人、黒上正一郎氏であり、翌々年昭和五年に僅か三十才の若齢を以て過度の勉学に斃れて死去してから、残された生徒の二名が相次いで他界し、三名が病魔に斃れた。正に孤塁を守って、一方に果敢な思想戦を展開し、他方に血みどろになって日本精神の学術体系化を企てたこの悲壮な一団体は、そのまゝこの世から消え失せてしまふかと信ぜられてゐた。だが地に落ちて死んだ麦はそのまゝではなかった。昭和十四年以来、社会の各層に巣喰ふ赤化勢力に対して唯一の原理から発する論陣と思想戦に寧日なきスタートを切ってから、当東大精神科学研究会を起し、全国的に日本学生協会の同志獲得、精神科学研究(ママ)を説設立したのであった。当研究所の存在は忽然として軍部、官界、民間の注視のまと【p.97】となり出したのである。国を誤るものを真に撃滅し得るものこそまことの建設者であり、まことの革新者でなければならないのである。

時代の嵐は、永久に亘って皇国青年の自主的精神を奪ひ来った大学を没落の危機に陥れむとしてゐる。現実の人生を遊離せる学問の強制がいかに国家生活を破滅に陥れ、人間精神の惰落分裂による災禍をもたらすものであるかといふことを、日本は今戦時の苦闘の中に体験しつゝあるのだ。東京帝大を中心とするアカデミズムの拝

外自屈思想、それこそ今日までの日本の指導者の心魂に植えつけられて来たのだ。しかも、有史未曾有の戦争を四ヶ年にわたり継続し来った日本の底力は、実にかゝる迷妄灰色の学問にも摩滅し去られぬ伝統的精神の威力、国体の威力によるのである。かゝる時、学生小田村

【p.98】寅二郎氏が昭和十三年十一月、時代の嵐に没落しゆく帝大内部にあって、深刻な矛盾に苦しみつゝ大学学風を批判せし為に大学依り退学処分を受けた、所謂、小田村問題は、正にこの時代的苦悶のあらはれである点に於いて、歴史的意義を有するものである。

見ゆる現実を支配する、見えざる思想の誤謬を死を以て正さむとせし小田村太兄氏は、大学当局の権力的圧迫に最後迄屈せず直進したのであった。之を契機として、決死的の思想戦は火蓋を切られたのであった。かくして反覆、又反覆、小田村氏をしていふべき事を語らしめず処分し去った大学の学術的無力と無確信を衝き、荒廃の極にある教育精神を新しく勃興せしめむこと念願し、全国の同志数千と協力して猛運動を転開したのであった。

【p.99】

斯くして、北陸に新潟高校問題、北関東に水戸高等校問題、九州に佐賀高校問題と相継いで起り、多くの犠牲を出しつゝも直進しつゞけたのであった。

正大寮新宴の歌

一、暁かけて都路に　二、吹雪すさぶ越の辺に
神出鬼没決戦隊　年あけたつや友どちは
かたみに決意交しつゝ　不逞悪逆学び舎を
み国仇なす醜ばらの　正さん心一にして
思想戦術砕破して　身をかへりみず臣の道
たゝかひいよいよ激化せむ　たゝかひたゝかひ進みけり

【p.100】

三、祖国の生命いまこゝに　四、み国の仇をはふるべく
まもりてたてるますらをが　国内に分れ戦ひし
悲しき願つらぬきつ　友ら今こそ相集ひ
如何なる困苦おそふとも　絶叫突喊迫撃の
合成威力にうちくだき　決戦の跡語らへば
戦ひいよいよ激化せむ　祖国の命燃ゆるかな

これは自然に生まれた歌であったのである。一人歌ふ事に依って皆思はず引きつけられて行くのであった。だが、この戦の中に若くして悲願を残る友等に託し行った幾多の先輩、友を偲ばねばならぬのである[22]》。

茲に、黒上正一郎大兄先生逝きまして十年、昭和十五年九月二十一日、田所廣泰大兄の記した慰霊御霊を祀る言葉を記し、如何に先輩亡き友の慰霊祭を厳修し居るかゞうかがはれるのである。

【p.101】

《「我等にとって生(共)死は限りある生を無窮の祖国生命に繋ぐ方途である。黒上先生はじめ同信師友の死を我等はかくのごとく実感し、その死にあひ、その霊魂を祀って我等もまた同じき道を継きゆくものであることを知ることを得、生死を超えた現実の共感世界に生きて来た。さうして、黒上先生も又同信師友の死後、我等がことあるごとに営んだ儀礼の殆ど凡べては慰霊祭であった。慰霊祭は我等の限りある生を無限の祖国生命にいまのうつゝに繋ぐ儀式である。そこに我等ははじめて日本国民としての戦死の意義を実感し、忠義の道を現実の感覚を以て認識し、三世を一貫する生を意識するものである。我等は悲しき併しながら賑はしき人生を実感するものである。我等のこの生が直接にわが大君にさゝげしめらるゝことを信知するのである。

【p.102】

明治維新の志士の歌は維新の先駆であり、又一貫せる臣民の念願であった。われらはなき同信師友の歌をよむことによって、志を同じくする者の最初の集ひの生命を伝へつゝ戦ふのである。我等はその歌の不朽に伝へらるゝ生命のみちあふるゝしらべに、戦闘の力滅源を見出したのである。」

黒上先生逝きましてから満十年を経過する。時代は今急転のさ中にある。しかしながら、われらは在りし日にかはらぬ情意に貫かれ、十年も一日と感ずる意志力に統一せられ、その意志的統一力は全国同志の心をつなぎ合はせつゝ、こゝに国民的進軍の威力を示すべき時となった。

皇運の天壌と共に極りなき限り、我等の戦は無窮につゞけられよう。我等の前には、大君の醜のみ楯とたゝかひたふれてみ国護りたる無数の祖先があり、我等の後には永久に同信【p.103】相続せらるべき同胞がある。この至極せる生の意義は(23)昭和の御代にみ国憂ひつゝ若き青年の中に偉大の感化を遺して戦ひたふれたる人のあることを歴史はやがて記録するであらう。さうしてその記録は永久に日本の青年の記憶の中に伝へらるゝであらうといふことを我等は確信し意志するものである。あゝ祖国をおもふ若き友らよ！今日こそまことにたゞならぬ時

である。くりかへし、くりかへし呼号し来った非常時こそいま眼前に現在する。急迫せる感情を意志に統綜して無窮を貫かむと念ずるとき、日本臣民の道は我等の戦ひを通じて開かるゝのである。その永遠の道は！》（黒上正一郎先生遺歌集による。）[24]

今こゝに黒上正一郎先生の遺歌集より数首を選びかゝげて見たいと思ふのであるかゝげ偲びたいと思ふのである。

【p.104】

《聖王のみことかしこみかゝる世をわたりしとほき世の人を思ふ。

虚仮の世にかくよびかはすみ友ありと思ふもかしこきわれらがちぎりよ

思ひ思ひゆけばまことにことばもなし

師友先輩のいまさゞりせばこのたびむなしくすぎなむと思ふ

今こそを深草のみ友に仰がしむあゝ史的悠久伝統威力を君は示しますか

（大正十一年二月「人生と表現」）

はらからとわかれし日よりかゝなべてはやひと月はすぎにけるかな

なつかしと偲ぶ心の胸にあふれつくせぬおもひをくみたまふらむ

友偲ぶ心も迫る夜々の月を仰ぎ見る日の又めぐりきぬ

かゝる夜は都もとほきこゝちしてはらから切にしたはるゝかな

昭和五年二月十日

吹雪する音すさまじく更くる夜はいかにいますと偲ばるゝかな

こぞの今思ひかへしてつくるなき心に偲ぶはらからの上を

たどりこしみちをかへりみゆくておもひ大御心にたゞ祈るかな

昭和五年二月十二日》[25]

【p.105】

第四節　全国合同合宿の意義と訓練

かくして、余の現在には何の躊躇がいろう。只前進あるのみである。余の強調せんとした猶太問題も、其の確信核心を離れては本末を顛倒する恐れあるのである。祖国防護こそ唯一の目的にして、猶太問題もその手段にあるのである。余は前進を固く決意したのであった。合宿

最初終の日、我々は感想をしたゝめたのであった。それに対し、田所大兄の序言を以つてその批判を聞かむ。

《「ドイツ戦歿学生の手紙」が訳出され、祖国のために殉じた若い魂が地上にとゞめた言葉の戦数々が我等の心を拍つのであるが、それ以上にこの素朴の感想集は永久思想戦を決意する日本青年の意欲に燃ゆる魂の雄叫びである。祖国日本無窮生命防護のために只管に個我を全体の中に没せむと、自己の思想生活の細部を検討する青年の精神的苦闘を全巻にわたって我等は読みとることが出来る。

この感想の委(委)くが如何に痛烈に自己を責め、如何に真摯【p.106】に自己の欠陥を認識せむとするものであるかを見よ。優秀なる日本青年は自己自身の内心の改革なくしては　天皇に対し奉る忠節のあり得ざる事実を痛感したのである。内心の改革、それは亦我等の言葉を以てすれば失はれた意志の奪回である。

しかしながら、青年の意志を強奪騙取したるものは抑々誰れであるか。それが明治以来の現代教育であることを直視する青年学生にとっては、内心の改革は言ふ迄もなく、現代学校教育の誤謬に対する徹底的戦闘を意味する。青年は自らの意志を得むとするのである。青年は前ヂエネレーションより独立して、その遊戯的立身出世主義の無痛感無生活の不忠雰囲気から離れて、直接に自己の生を国家生活に、その歴史に結合し、決死邁進の唯一の方法を以て忠節を尽すの臣民としての念願を達成せむとするのである。

かくのごとき酷烈の改革と要請とが卓抜なる青年の見えざる内心に於いて行はれつゝあることを見逃してはならぬ。抑々かくのごとく多数の【p.107】選ばれたる青年の一人々々の心の内部に於いて、その各自の責任ある意志を以て、かくも痛烈に明確に現代日本国民思想の誤謬に対する徹底的戦闘が宣言せられたることがあったであらうか。云ふべくば教育改革の最も具体的なる方途はここにある。文部大臣等が現代誤謬思想学術の本山東大改革について一言も触れずして、何等かの教学刷新が可能であるかの如く揚言する現代に於いては！今や青年はその内心に於いて現在の堕落と戦ってゐる。彼等には守るべき自己、愛撫すべき自己はない。あるものは捧げられたる一切である。

我等はこの運動が史上未曾有の国民宗教運動であることを予感する。凡ての生がそこに捧げらるゝ大精神世界の展開を我等はやがて見るであらう。我等はまた、かく

のごとき世界こそ、天皇親政の大御代であると信知してをる。我等の運動を政治運動と言ふべくば、それはその窮極を決定せむと目ざすものであると言へよう。何となれば【p.108】天皇統治の真内容は「しろしめす」の言葉にも知らるゝごとく、国民の精神的統一以外にないからである。

決定された意志の方向は不動である。我等の運動には退転なかるべきである。この数十名の感想の中にも約束されたわれらの将来を読むことが出来る。時代が一つの勢であることを我等は十年と言はず、数年にして実証するであらう。》（学生生活叢書第五輯進めこのみちより）[20]

しかして又、如何に全国合同合宿の訓練が進められて行つたかを、同じく「進めこのみち」に依って鬼少しく見たいと思ふのである。

《百名以上の思想訓練合同合宿は、現代教育に於いては不可能事とせられてゐる。その証拠にかゝるものは未だ曽て行はれたことがない。近頃未だ塾教育が唱導されてゐるのは思想的訓練が結局数十数名を限度とし、而もその効果発揚のためには長期を要すると云ふ通俗旧式観念が支配してゐることを示してゐる。我等の合宿はかゝる観念【p.109】を根本から覆すものである。昭和十四年当麻に於いて百二十名の合同合宿をやった。本年は三百数十名である。而もそれは十日間の短時日である。

去年種々の合宿遂行上の不備にかゝはらず、合宿最後の日の感想が異口同音に「自分の一生の目的が之できまった」とあったことは幹部の我等として感謝もなき驚異であったが、過去一年、これを文部省の勤労報国隊の感想発表座談会の内容と比較して、その差異に付せらるゝ、重大意義を論じて来たものであった。今年は感想集をつくる余裕が出来たことを欣ぶとともに、この感想集の内容を全国の青年に関心を有する人々が注意して読まれることを希望するものである。そして我等の合宿が如何に青年の魂の底を揺がすものであるかを読みとられたいのである。

思想訓練は言ふ迄もなく小数に対して行はれねばならぬ。又それは長期を要する。しかし、この二つの要点をとり逃がさぬならば、多人数の協力によってその効果が促進せられ、従って驚くべき短期間に非常の効果を【p.110】示し、それが長期のといふよりも一生涯をかけての協力研鑽に結合せらるゝ契機となることによって、青年教育の理想的状態を示すこと、なることを見逃してはならぬ。まことに統一原理に指導された合成意志とい

ふもの、驚嘆すべき結果については直接それを体験したものでなければ実際に知ることは出来ない。しかし、本感想集の如きを読まれる人々は、その言葉のうちに実感せらるゝものがある筈である。

本年度全国合同合宿七月十六日午後六時より、二十五日靖国神社々頭に於ける解散式迄十日間四隊二十班に分つて行はれた。班長は我等の運動の中枢部に動く大学生であった。隊長は最近大学を卒業したものであり、その上に本部が構成せられてゐた。毎夜九時半、一般合宿員を就寝せしめてから本部で行ふ隊長班長会議が十二時一時迄厳粛真剣に続行せられ、更に各隊に於て殆ど二時迄班長会議が行はれ、隊長班長は毎日三時間の睡眠時間で戦ったことは、合宿の成果の上に銘記せらねばならぬことである。【p.111】殊に各隊長の努力は決死そのものであったことを忘れてはならぬ。我等の合宿に兎角の言を弄する輩はこの事実を直視して物を言ふべきである。

現代教育界に欠如して皆無に帰する「指導力」といふものが現実に実存することを我等はこゝに示し、やがて更に大いなる事実を以て顕示するであらうことを予告するものである。付言すれば、班は一つの塾に相当するものである。この塾は合宿後月余の今日と雖もそのまゝに保たれてゐる。塾は軍隊式大部隊訓練と併用せられ、双方その効果を倍加したのである。かくの如きものこそ、在来日本が千数百年の経験を通して完成した教育方法と、西洋近代的教育方式とを綜合せるものであって、而もそこには研究と実行とが合致せしめられ、学術と戦闘とが如一ならしめられて居る。来るべき唯一の教育形式といはねばならぬ。〈以下、四行分ほど省略あり：翻刻者注〉

近時独逸の外面的模倣として行はれてゐるアルバイトディーンストが殆ど何らの精神的殊に思想的効果を挙げてゐないにも不拘（ママ）、依然として【p.112】続行せられてゐる愚を見るものは、我等の運動を当然に注目せねばならぬのである。

我等はかく周到に必然的順路に於いて失はれたる精神的世界の建設に努力して来た。今や依るべき唯一の力は精神の結合である。

生命すらこれを容易に失ふ動乱の現代に、失はれざる唯一のものを確保し、そこに偉大なるものを建設することに青年の努力は傾けられねばならぬ。この感想集は三百数十名の精神を永久に現実的威力として結合するものである。国民精神が散沙流雲に帰せられてをる現代に、この結合は目には見えねど大いなる力を予約するもので

ある。来るべき時代はこゝに在る。この言葉の中に。而していま現実に之に呼応しつゝあり。またしつゝゆく全国同志の叫びの中に！力はかくわれらにあり！》、（進めこのみちより[27]）

かくして余の意志の方向は、単なる個人的煩悶依り、同志的感覚への統一性に向けられて行ったのである。戦ふところに友あるを【p.113】思へ！　友こそ我々の同志である。全国の同志の雄叫びこそ、今あげねばならぬのである。運輪（ママ）の都合上、茲武州御嶽に二百数十名、又、京都比叡山に集ふ友二百名は、共に雄叫ぶ聲に自然に結ばれて行ったのである。共感の世界は現実に茲に見られたのであった。誰れの口からともなく、明治大正昭和を通じての憂国の詩人、三井甲之氏作の『進めこのみち』の進撃の歌と共に前進の雄叫びはあがったのである。

進めこのみち
一、進め斯道　一向（ヒタスラ）に　　二、神の聞きし　斯道を
真直ぐに進め　神代より　　み民は進む　大君の
定まれる道　斯道を　　任のまにまに　み民
さまたぐるもの　何ありと　　らは　身を顧みず
本末（モトスエ）切りて　打ち払ひ　　永久の祖国のいのち
（と）もろともに　　戦ひたゝかひ　進むべし　　戦ひたゝかひ　進むべし

【p.114】

最後の全体会議は二十五日開かれたのであった。余は再び立って合宿の感想を述べ、次いで今後に於ける学生運動の方途、及び早大精神科学研究会[28]前進計画、学内運動を述べたのであった。早大学徒合宿に来る者三十有余名、此の一丸となって突進すべきである。今こそ秋、帝都は尚依然として静まり反って居た事は、帝都への進撃開始の日、劇的場面が予想されて居たのである。

昨年十五年七月、信州菅平全国合同合宿に於ける記録映画『文化の戦士[29]』こそこの戦へる友の進撃の雄叫びであったのである。我等は又こゝに、新たなる同志と共に出陣せんとして居る。其の夜、夏とは云へ寒き御嶽山上の一角で、出陣の饗宴の夕べが行はれたのであった。益々御戦ひと共に益々激化し行く戦ひと友（ママ）に、益々新たなる歌がつくられて行ったのである。

【p.115】

出陣の饗宴
五、御嶽の山に友つどひ　　六、祖国の急を救はむと
ひんがしの方のぞみつゝ　　決意に燃ゆるますらを

決意を語る響宴（ママ）の　　は　悲しき生のたゝか
この一時に星屑も　　ひに　概念思弁墻破し
またたきそめぬ歌へ友　　て　み国のいのちにつ
あゝ出陣の雄叫びよ　　ながらむ　あゝ出陣の
　　雄叫びよ[30]

神州不滅の確信こそ、我々唯一の信である。

解散式と共にに当り、闘志満々としたその眼を醜輩打ちほろぼさんと決意に満ちたその眼を　大君居はす帝都の空に向けられ、国歌聖奉唱と共に神州不滅日本学生協会の歌『神州不滅』が歌はれたのであった。

神州不滅　　三井甲之先生作詞　信時潔作曲

【p.116】

一、皇神の見はるかします　　海行かば水漬くかばね
四方の国めぐる海原　　山行かば草むすかばね
海原は八重の頻波　　空行かば散るさくら花
八潮路の潮の八百会　　さゝげたりみ民のいのち
祖国日本こゝにぞ立てる　　祖国日本われら守らむ
神州不滅われらは信ず　　神州不滅われらは信ず

一、しきしまの大和島根に　　顧みず進む皇軍
語り継ぐ祖先の伝統　　祖国日本われらの肩に
大君の詔畏み　　神州不滅われらは信ず

【p.117】

永久に此の地を余が思想生活の発祥地として忘る事の出来ない、又様々の全体会議に於ける明大井上君[31]との論争、絶叫、共感、痛感の衝突、デイルクハイム氏の講演[32]等々を残して、静かにケーブルカは山を降りて行ったのである。

「進めこの道」の歌は、御嶽山頂依り未だ止まず、太鼓の音は続く、帝都への進撃の声は益々高まって行ったのである。明治神宮を整然と拝参、再会を期して別れたのであった。

第五節　再会の歌

余は、御嶽合宿依り帰るや否や、直ちに戦ひを開始したのであった。だが、余りにも現実依り遊離せる無感覚な、腐敗し沈滞し勝ちな都会生活者には、反って逆効果的、変人、超越的、独断的存在たる影響をうけるのみであった。次第に、余自身のみ苦闘する事の【p.118】苦痛と苦悶に対し、真に御嶽の山に結ばれた友の名を呼ぶ

事の切なるを味はさゝれたるのであった。祖国防護の文化の戦士たる友こそ、今の自分にとって最大の力ではあるまいか。余は決然戦ふ事を誓ったのではないか。此の意志こそ、益良夫の真情であると。桑中野区新井薬師に於ける桑野寮の生活の中に、日々の「明治天皇御製」拝誦を怠らなかったのである。余自身の真情を、生命のまゝに訴へて行く、生命的反発こそ唯一の生命である。余は屈しなかった。下山以来の闘ふ一週間は過ぎた。八月一日こそ武州御嶽京都叡山に集ひし友等の再会の日である。(33)

原宿駅に集合、学生協会のバッヂを胸に定例の明治神宮を隊互を整へ参拝

みたみわれらもろともにまめやかに、
我大君に仕へまつらむと誓ひまつらむ

心厳かに拝み奉れば身の粛厳たるを覚えしめられるのであった。

【p.119】

斯くして、吉祥寺井之頭へと行進、井之公園内の広場に再会の喜こびを語り合ったのである。

再会の歌

七、燃ゆる篝火囲みつゝ　八、おごる醜草なき払ひ
掃妖の策めぐらせば　み国の命守るべく
神も力をそふるらむ　固くまむすびしますらをの
ためらふ勿れますらをよ　この雄叫びに鬼神も
剣とり持ち待ち問はむ　悲憤の涙おとすらむ
あゝ進撃の軍楽よ　あゝ進撃の軍楽よ(34)

再び進撃の歌は歌はれて行ったのである。

全体会議の席上、余は起って絶叫したのである。『由自己の力の無力感の痛切さと、孤独なる闘ひの余りに苦るしき為に、余は友を求めて止まぬ事を訴へたのである。小田村大兄はそれに対して、無力感、孤独感から起ち上がるのが真に【p.120】益良夫であり、又起ち上らねばならぬのである。そこに、友と通ふ共感の世界があるのである。友らと共に友を偲ぶこと、それが我々の世界であると。(35)

意志の方向、それが余にとって最も困苦るしき問題であった。だが、此の言葉に、友らとの集いに、又新たなる力が湧き来るのであった。夕宴と共に、心行く迄「進めこの道」、「神州不滅」、「出陣」「野宴の歌」、「出陣の歌」、「再会の歌」を歌ったのであひ、歌ったのであった。正大寮の生活を知ったのもこの時である。(36)

この再会の喜こびをいだいて故郷本宮へ帰省し、その

間原理日本社出版の蓑田胸喜氏著『学術維新』『国家と大学』とを五日間にて読破したのである。[37]

だが、帰省、静養の暇もなく、八月七日、都下学生協会代表委員会結成式を杉並区松陰神社にて与行（ママ）すとの報らせに、同夜上京、馳せ参じたのであった。[38] 各校代表者、再度の会合こそ意義あるものであった。

【p.121】

我等は尚一層固く結ばれて行ったのである。早稲田の小野文雄兄[39]、山川雄二郎兄、卑稲田の高木主郎兄高木三郎兄[40]、大庭兄[41]あり。桑兄[42]あり、明大松本勲兄、法政折田兄―御嶽四班の友国大石川章[43]あり。由緒深き松陰神社の森御社に集ひし友こそ、永久に離れられない結束の友である。同夜直ちに本宮に帰郷、翌十日上京、十三日に開かれる都下代表委員会研究会出席の為正大寮に向ふ。[44] 上京の際本田姉妹同行し、東京見物に数日を費し、為、非常に疲労且又東西奔走の為、身次第に疲労を覚えて来たのであった。

だが運動の堋進展は急務である。一刻の余裕もあってはならないのである。再会の日、国民運動転開の為『世界観大学』を提唱したのであったが、此の世界観大学に全力を集中すべく、余はポスター、ビラ、リーフレット配布の為、炎天勢天をこがす、焼くが如き暑気の八月中ば、神田三省堂前、新宿、新井薬師、中野に立ちて将又、省線の中に【p.122】十六日依り二十四日の間歩いたのであった。余は屈しなかった。思想戦士として文化戦に剴る斃れるこそ、本望ではあるまいか。命の限り、身の限り、戦ふ以外ない事を確信したのである。

十七日依り二十日迄、都下代表合宿が小金井浴恩館に開かるゝや、余は率先して参加したのであった。しまし御製拝誦、聖徳太子十七条の憲法研究を中心に研究は進められて行った。由フリートーキングは行はれていった。余は御嶽合宿に於いて提唱訴へんとして訴へる事の出来なかった、猶太問題について研究発表をしたのであった。其れについて、長府萩依り出されて居る日刊紙『日本太郎』記採（ママ）の都下学生夏期合宿記録（二）[45]について述べて見て見よう。

《『前略　菅野兄[46]まづユダヤ思想につきシベリアに於ける猶太人の宣言中の『われ等猶太人のみが持つ力をもって、君達に自由を与へ。』といふ言葉等を引用し、ユダヤ人の征略意志の恐るべきを述べる。然し乍ら【p.123】猶太人が自由主義を各民族に植えつけ得たと信（ママ）た信ずる事は猶太人の身勝手の独断であり、人の心の

弱点につけこんで来たのにすぎないのである。

吉田兄房雄兄[47]より

亜墨奴が欧羅を約し来るとも備のあらば何か恐れん

備とは艦と砲との謂ならず、吾しきしまのやまと魂を引用し民族精神だに健全ならば猶太如きバチルスの徒の入りこむ余地なきことを述べらる。更にユダヤ研究家の殆ど悉くが落ちこんでゐる所の世界の一切の動きがすべてユダヤの陰謀によるものなりとする見解の楽天的危険性を指摘され、思想そのものをこそ問題にすべきであると述べられ、更に『ユダヤ民族の文化だけを見てその誤謬低卑はわかるものではない。それより勝れたる高度な民族文化、その最高のものが日本文化であるが、それと対比せしめる事によって誤謬を確認し得るのである』と猶太の惨忍酷薄の選民思想に対し、畏くも[48]明治天皇御製を拝誦しまつる各自心に浮ぶ、御製を次々と拝誦しまつり抱納無【p.124】窮の大御心の中に猶太をも中言向け和すべき確信を得しめられたのである。日の本の民として生くる喜びはそのままに『岩がねをきりとほしても』意志を一貫して行く。勇猛心でなければならぬ。[49]》と記してある。

茲に余は決意の歌をしきしまの道に表はしたのである。

松陰先生を憶ふ。

「討たれたる吾をあはれと見む人は君を崇めて夷拂へよ。」

戦ひて戦ひたほれし先生の悲しきみ心うけつぎ生きむ

数ならぬ吾身なれども国の為つくさむ心こゝに定りぬ

ユダヤ的怪物思想おそふとも、何ぞ恐れむ大和魂

合宿を終へるや否や、余は正大寮への入寮を決したのである。

塾々田疲労翌日、風邪と疲労の為、高熱の為、悩まされつゝも移転の為荷造りをなし、桑野寮（福島県安積中学卒業生同校卒業生の寮、早大法学部卒業の兄五年半入寮し居れり）を去って二十三日、入寮したのであった。[50]【p.125】

だが、身体特に胸部圧迫の為苦呼吸困難となり、二階の階段を上がるに容易でなかったのである。然し乍ら、生れて以来一度も病床に伏した事のない余にとっては、恐怖は感じなかった。不屈不撓の精神力に生きしめられて行ったのである。

翌二十四日、御嶽合宿四班の集ひが御茶之水駅東京パ

ン二階にて行ったのであるが、食欲なく、歩行さへ出来得なくなって居ったのである。十六日、リーフレット配布依り一週間余り苦痛を通して来た事も、余の身体依り来たる自信、自惚れであった事も事実である。

世界観大学夏期講座は神田文化学院に開催されて居ったのである。学術批判力養成の為、余も又苦痛の為に係らず、真剣なる聴講を続けて居た。真に内心を討つ言葉のみであった。

だが、人力の尽きる秋が来たのである。二十九日講座の夜、会場に遂に余は卒倒してしまったのである。此れが余の十年八ヶ月に亘る病床生活に着く最初の日とは夢には思はなかったのであった。

助手小山初兵衛大兄[51]に送られ、静かに正大寮に帰りつく事が出来た。【p.126】然し余の心は淋しかった。中途に挫折し、容易に起ち上る事も出来得なくなったのである。翌日、医師の診断の結果は湿性肋膜炎とある。[52]だが、余は恐怖も感じなかったのである。中学時代一度の病床生活もなく、在米時代四年半一度の風邪すらもなく、柔道の為足痛を覚えたのみの余にとっては、肋膜炎の病名すら知らなかったのである。一、二週にして恢復する事と信じて居た事は、今考へると実に滑稽千万とも言ふべきであらう。

第九章　療養生活七ヶ月

第一節　武蔵野療園[53]生活

昭和十六年九月、残暑の候未だ去らざるこの日[54]、レントゲンの結果、湿性肋膜炎の宣告を受け病床に伏したのであったが、寮生の多くは世界観大学の為準備其の他に没頭し、孤り一室に横はって去く来を静かに反り見、行く手【p.127】思ふ時、逆境の中に立ちいたった事を始めて痛切に感じ来たったのである。病気の性格が次第に明瞭になると共に、益々余の深刻の度は深まって行ったのである。果してこの身体の自由にならざる身を何処に横ふべきか。果して自分は何処に行けば好いのであらうか。思へども尽きせぬ思ひぬ（ママ）悩まされるのであった。両親兄弟は異郷にあり、一軒の親類も東京にはなく、将又、福島にある叔父、叔母、縁者に知らせるには余りにも頼りなく、余としても偲びなかったのである。東京帰国以来、東京生活九ヶ月余りにして病床に伏すとは、余自身夢にも考へざるこの事実。此の侭自滅し行く運命であったのか？[55]だが、余の意志は明白であった。不屈不撓の精神は燃え上って来たのである。『人事を尽して天命を

待つ』

　無頓着の為とは言へ、斯く迄身を過労に落し入れたのも、自分の責任からである。合宿以来の急激なる過度なる精神的動揺、しかし、自分は飽迄、最後の斃れる瞬間迄、闘って来たのだ。最後迄生き抜く、自己の力を最後迄ためすべきだと確信したのであった。

【p.128】

　昭和十六年九月八日、正大寮発行の同信旬報『たゝかひ』[56]の巻頭言に、訓練局長南波恕一大兄[57]は、新秋とともにと題し、その中に余の事について次の如く記してある。

《『御嶽、比叡の両合宿に於て約三百名の新しき友等を得、我等は来るべき蹶起の時を望んで激しい邁進情意の奔騰を覚えたのでありますが、八月一日の都下学生再会の日に於て共に明治神宮参拝を行ひ正大寮夜宴に臨んだ者は百余名に過ぎなかったのであります。併し之は夏季休暇中といふ条件制約を思へば百名にして尚多しとせねばならぬのであります。当日はるばる福島の帰里からただ十田この一日の為めに飛んで来られた早大菅野兄の没我的な熱情は比叡をも含めて御嶽合宿の偉大な成果を客証する生きた実例であると信じます。尚その菅野兄も八月下日[61]正大寮入寮と同時に緊張の連続は遂に肋膜炎の侵

すところとなり、只今東京市設療養所近くの【p.129】武蔵野療園の一室に烈々たる闘志を抱ゐて病床に呻吟して居ります。同兄は八月中旬に開始された都下代表委員会研究会の結成式が松陰神社境内で行なはれた際も福島の地からリクサックを背負ってその朝はせ参じてくれたのであります。之は菅野兄一人に限りません。全く都下同志全員の思ひでありました。』後略》

　神州不滅の確信こそ、余を強く生きしめて呉れたのであった。だが然して又、御嶽の友、四班の友、正大寮の友、世界観大学の友、桑野寮の友、友は余を見捨てなかった。御嶽の四班の副班長、外語の額賀強三兄の骨肉にまさる友情こそ、余の生涯を通じて、否、永久々々に忘れる事の出来ぬ事実である。医師の診断の為神田の建[ママ]康診断書[ママ]への同行、東京武蔵野療園との交衝[ママ]、入院手続、荷物整理、衣類の整理、運搬、休学手続、一切総べて同兄のなして呉れたものであった。[58]【p.130】今こそ余は友に救はれ、再び恢復を待つべき療養に専念する事が出来るのである。

　早大先輩、御嶽合宿の余等四班の班長たりし大林大兄を始め、葛西大兄[59]、今泉大兄[60]に囲まれ、九月四日入園と共に激励されて行ったのである。由々の友依り便りは嬉

しいものであった。だが、内部的生精神生活の安定を得ると共に、外部的諸問題に対する余自身の苦悶の度は益々深刻の度を加へて行った事は、諸種々の客観的対外的状勢、政治的動揺、国際関係の不安の度が加はゝると共に思索する日が多くなって行ったのである。

昭和十六年六月、父渡米せる翌月、急に資産凍結令が下り、日米間の為替関係が局限され、窮極に限定されると共に、当事余の病床生活の始まった当時、既に両親との通信の【p.131】絶縁し居った事は余の心境を益々混乱ならしむるのであった。郷里依り馳せ参んぢる者なく、只友にのみ前途を託す余の心中も又、悲壮と言ふべきものであったのである。

八日、胸部依り水九〇〇瓦をとる。虫再度の診断の医師の診断は香しからず。微熱は尚以然(ママ)として続く。余は心静かに苦るしき胸を抑へ、涙の中に如何時かは着くであらうと一縷の望みの下に遺書(ママ)を認めたのであった。涙はとめどもなく、用書き記るした後の文字の上に涙れゐ流るゝのであった。胸あふれ来て手進まず。しばし泣いては書く、漸く書き終りて歌十数首を書き止め、最後に松陰先生の

身はたとへ武蔵野のべに朽ちぬとも

止め置かまし大和魂を

書きしるし、書きつけ終りて後の歌書き連ね、封書して、最後の親に送る手紙として出したのであった。然し、これ又最後の手紙となっ【p.132】たとは神ならぬ身の余自侭身知るべくもなく、運命の杏皮肉と言ふべきか。棄ヤメリカに惨忍極まる敵米国に抑留されつゝある両親兄弟にして、余今茲に健在に居るとは夢にも想像し得べくもなく、又余自身知らすに術だになく、むなしく満二ヶ年余り通信絶えし侭、悲運の涙とゞめかねつ怨敵米英に対する悲憤の涙、今こそ身自らペンを捨て思想戦依り剣をとり、武力を以って宿敵米英に報ゆべく起ち上る秋が来たのである。永遠に我等の信は確証されつゝ、行くのである。

だが、当時未だ浅薄なる未体験なる一青年余にとっては、現在生こそ最大意義として取扱はれて居ったのである。一日五円にあまる入園費、十日如(ママ)の支払、資産凍結に【p.133】経済的圧迫の為、次第に両親依り送金の途絶えし今こそ、生きるには自己の力以外にはないのである。だが、病身の余に出来得る事は何もなかった。徒らに、学資として貯金して居った貯金が減(ママ)るのみであった。そして此の生活は尚又続くのであった。

余の病床生活にある間に、学生運動は尚一層激化し続けられて行ったのである。早大第三回浴恩館合宿の於(ママ)は れたのは、余の入園直後であった。合宿参加を予期して居た余が、当然今茲に斃れて不参加の止むなきいたった事は実に残念であった。だが余今はたゞ余の決意書き送る外なかったのである。

早大の浴恩館合宿の友に送る　　十六年九月

武蔵野療園依り

小金井の浴恩館に学園の危機救はんと集ひし男子ら雄々しく
集ひたる早稲田男子の願ひをば貫き通さんこの秋にこそ

【p.134】

この秋にと心に待ちし其の際にしこの病に斃れ臥すとは、
身はたとへ病舎の内にこやすとも心は常に国憂へつゝ、

そして又、友依り返へしのみ歌に真に慰まぐさめられ、励まされるのであった。

又両親を偲びては

外国に我が身の上を念じつゝ、在はす父母いたく思は(ほ)ゆ

又昨年来の（十五年十二月）激しい生活を回顧しては

渡日の禁を破りて独り我はるばる波涛を越えて帰りし

事計りなりてぞ今は船上に遠く去り行くロスの灯を見る（ロスとはロスアンゼルスの意な(ママ)）

だが、余の病床に於ける決意は変らなかった。

今さらに惜しき命と思はねば(ど)心に残る行く末の世ぞ
数ならぬ身にはあれども大君のまけのまにまに戦ひ行かむ
我が命今さら惜しとは思はねど打ちて死ななむ醜の奴ばら

【p.135】

国の為仇なす仇を打ちて後死なばと思ふ病にたほれて
大御歌をゝろがみ奉り今日も又世の行く末をうれひつるかも
国の為心奮ひて立たんとしやまひにたほれ悲しかりけり
病舎にも人とし生くる道ありと今の我にも知られけ

るかな

又友等の見舞の言葉に答へて

み友らの厚きみとりをうけて今は再起の日のみ待つばかりなり

友どちの厚きことばに心なごみしこのやまひの癒るを待たむ

なつかしき御嶽に結びし友がきの厚きみとりを身に(に)(を)うけんとは

戦ひて傷きたほれ病床にひとしほ思ほゆ同信の友

なつかしき友の面影偲びつゝ悲しき願我はしたゝむ

桑野寮の津野兄[61]の訪れに

なつかしき桑野の友の訪れにしばし忘れぬ病の身をば

一夏を君と別れて過す間にかく変る身とは誰が思ひし

次第に談深まり行くを思へば

夏虫の聲も漸く稀になり夕静かにキリギリス鳴く

【p.136】

秋空の雲をば眺め一日をむなしく過しぬ病床の上に

なれど又妹の切なる便りを受けては

妹のせつなる心しのばれていたつきの身をもしばし

忘れぬ

其の間、所員安武昇大兄[62]が同療園に、しかも隣室に居らるゝ、関係上、屡々強い意志的言葉を聞く事を得たのは、余にとっても真に助となったのである。所員南波恕一大兄の御見舞の言葉、会見て日未だ浅きにも係らず理事長田所大兄の度々の御見舞の言葉には、涙の外なかったのである。

今茲に、丁度田所大兄宛への書簡あり。拙文乍ら其の抜粋を記し、当時の余の心境を見たいと思ふのである。

《『病気の経験過は、諸大兄の厚き看護の御陰にて日に順調にて現在にては散歩も出来得る身となり、越年を待てば退園も可能かと思って居ります。

病床にて先生の御見舞の御言葉を熟読思考致し

【p.137】まして、現在の小生の心境が先生の言はれましたお言葉と全く一致致して居り、又、沈滞し勝な療病生活の中にありて、強い激励のお言葉を拝読致しまして、なほ一層の精神的力強さを感じて居る次第であります。

此の一ヶ月間に受けた精神的苦悩、又真の友情の世界、又野中、百武両兄の死から受けた我等の運動の非劇(ママ)、そして小生自身の病ひから得た体験（即ち呪詛、焦燥に充ちた悲惨な気持から解脱せんとして）そして考へさせら

れましたのは、先生の言はれた、痛感の極思ふも盡せざる事のさとりであります。

今や祖国は古今未曾有の危機に直面、反国体の思想は国内に溢れ、政治は今や瓦崩せんとしてて(ママ)居る時、病床に斃れた身の不忠にして、且又、不考(ママ)な我身、病ひは時代の悩みとは云へ、余りにも悲惨なりしあの苦しみから、其の諦観信来乗託の心境になれたのも、私の生涯を通じて唯りの最もよい体験と信じて居ります。そして此の時期こそ、【p.138】絶好の修養期と考へ、内的精神的努力を続けて居ります。

親鸞上人が「大悲の願船に托乗して光明の広海に浮びぬれば、至徳の風幹かにして血禍(業)の波転ず(63)」と云ひ、臨済禅師が「随処作主立処皆真(64)」と言はれた言葉により、今迄地獄の如くに自分を責め苦しめた娑婆はそのまゝ寂光の浄土となり、煩悩はそのまゝ菩提となり、むしろ幸福感を味ひ得る様になりました。

又、先生の引用せられました浄土和讃の「光触かぶるものはみな有無をはなつとのべたまふ」を再三思考致しました。この五官に味ふ国体の信、この信に客観化された意志が生のよりどころであり、それは自然治癒力であると言ふお言葉に、真の無礙の活動力生命力が溢れる感が致します。

世人の嫌ふ病床の中に、真の生命感、国体の信を味はひつゝ、治療の出来る心境に立ちいたった私は、今大きな観喜(ママ)の世界に【p.139】没入して居るとも言ひ得るでせう。

日々病床に、安武大兄に万葉集其他の読み合せを少しづゝ、御指導を戴いて居ります。そして、戦場こそは最上の学校、病ひは時代の悩みをモツトーとして、修養致したいと思って居ります。（昭和十六、十月(65)）》

東京の友と共に、故郷に於いて余の事を最も心にかけ心配して来呉れたのは、余の幼年時代依り親密に面倒を見て来(ママ)れた父の友人、本宮の人国分氏夫妻であった。余の病気の報らせと友共に、直ちに上京して見舞に来て呉れたのであった。余の好物を多く持参して来て呉れた事は、縁者少き余にとっては実に百万の味方を得た依り力強かったのである。感謝の気持ちで一杯だったのである(66)。帰省する度事(ママ)に、親身の及ばぬ世話になるのも実にこの人なのである。又もやこの大病にとりつかれ人知れず難儀を重ねて居る余に、救ひの手は向けられたのであった。熱は以前(ママ)として三七・五度【p.140】を下らず、故郷に帰るに適せず。だが、余の安否をきゝ、本宮に帰って行っ

たのである。余は感謝の気持ちで胸一杯であった。

　此の間、正大寮の友達が全国巡廻の為、北に、南に、西に、又東に旅立って行った事も聞いた。その成果も、同信旬報『たゝかひ』を通じて省細（ママ）に知る事が出来たのである。又、見舞に来る友を通じて、過激の運動依り病を発し尚み国憂へ友偲びつゝ、戦ひの勝利を確信しつゝ、花と散った水戸高等野中兄、佐賀高校百武兄の事死をも聞いた。黒上正一郎先生十一週忌の慰霊祭が、全国各地各同信団体に於いて行はれた事も聞いた。第一回世界観大学の開催された事も、十月全国代表者会議の開かれた事も病床にあつて聴いたのである。友依り「たゝかひ」を通じて、又、通信に依って聞いたのである。

【p.141】

　学生運動は、余の病床にある間に刻々と進展して行って居るのである。十月十七日十八日、全国代表者会議の席上、田所大兄より『日本青年行動綱領』[67]の発表あったと聞くの宣言並に、『思想戦戦闘綱要』[68]の発表あったと聞く。これこそ、我々学生運動に対する一段階を与へたものと信ずるのである。

註

（1）拙稿「菅野武雄「最後の手記」（一）」（『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』6、二〇一二年三月）。

（2）大正一〇年一〇月、在京の安積中学出身者有志の手により、東京市外戸山ケ原一丁目に設立された同校卒業生の為の東京学生寮。程なく戸塚原に移転、その後、昭和七年七月に中野区新井薬師に病院であった建物を購入して再移転。菅野兄弟が寄宿していたのは、この新井薬師の桑野寮であった。一九四五年五月、空襲のため焼失し、その後再建されることはなかった。一九七六年一一月、安積高等学校敷地内に「寮友」による同寮記念碑「友愛の碑」が設置されている。安藤重春編著『東京桑野寮誌』一九七六年。本手記一二四頁参照。

（3）「［一九四一年一月］六日　父、浅丸（ママ）間にて横浜に来り、大島屋に泊る。出迎へに行く」「［五月］三十一日　父、楽洋丸にて帰米す。午後三時出帆。これが余と父の最後の別れとなるかも知れぬ」（菅野武雄「日記抄」二〇〜二一頁）。

（4）「人は緊張し、眼は自己の職分に集中され、足は戦線に向けられ、口は聖戦完遂を強張し、真に一人の遊客あるを思はせられなかった（中略）余は思はず襟を正さしめられたのであった」。本手記六二〜六三頁（拙稿「菅野武雄「最後の手記」（一）」八四頁）。

（5）菅野の「日記抄」には、「［一九四一年四月］入学の為多忙。政経攻究会（政治理論一般、内田氏）自動車部に入会す」「五月三日　政経攻究会歓迎会、於稲門堂にて」といった記述が見られる（「日記抄」二一頁）。一九〇七年創設の

「政治経済攻究会」。一九三九年八月現在で会員一二〇名、指導教授鹽澤昌海。文部省教学局『学内団体一覧』一九四〇年三月、一二六頁。なお、当時早稲田大学には、「ワセダ・アメリカン・ソサエティ（稲米会）」という日系米国人二世相互親睦のための会員二〇名の団体があったが（前掲同書、一三七頁）、菅野の手記にはまったくそれについての記述は見られない。

（6）早稲田大学で政治学を講じていた内田繁隆。内田満『早稲田政治学史研究』東信堂、二〇〇七年、三六～三七頁。内田繁隆「東亜共同体の史的背景」（『社会経済史学』九巻六号、一九三九年、五五七～五八三頁）など参照。後に、早大精神科学研究会による運動の一環として菅野等は、「政治学教授、内田繁隆氏の東亜協同体論、観念的日本政治理論、日本的世界的と題する氏の意志こそ、許されざる存在にて、氏と論争せる事数回に亘るも、面接の機会なく、以前（ママ）として現在同様の講義を継続し居るを見ても右吉村教授と同格の存在にして断固として許されざるものである」（本手記一八五～一八六頁）と積極的な内田批判を展開するようになってゆく。しかし、菅野は御嶽山合同合宿において、内田の東亜共同体論を得々と披露して、大林班長らから批判され、「東亜協同体論者の意志の方向こそ、最も危機であった」と考えを改めている（本手記八〇～八一頁）。菅野のここでの批判は、学生協会の運動に没入してからの所謂後付けの議論と考えられ、むしろ、日系二世としてのアメリカでの苦渋の経験・生活体験に依拠しつつ思考してゆこうとした菅野にとって、「アメリカに於ける体験的信念の学は何等役立たつ、単なる観念的イデオロギの弄び」に見える内田を含む早稲田大学での講義一般への批判という側面があったものと考えるのが妥当であろう。そういった不満が菅野を日本学生協会の運動へと導いていったと考えて良いように思われる。従って、日本主義的観念論の世界に接し、学生協会の活動に没入してゆきながらも、「政綱立案者」としての学生協会幹部への人格的信頼を失うことはなかったものの、彼等の「観念的自己満足優越感」に対する率直な疑問と懐疑とを失わず、「余自身の過去に於ける雑多の体験、特に海外生活、労働生活、移民生活の豊富なる体験を活かすべき道」を模索し、実体験に基づき現実の中で行動する「政治家」として立って行こうとする姿勢へとつながってゆくことになる（本手記二三一～二三四頁）。

（7）「六月」六月（日カ）　ユダヤ研究会を筒井兄と余とにて創立す。会長に中島学生課長を戴く」「二十六日　ユダヤ研究会を開催せり」（「日記抄」二一頁）。事実上、日本学生協会の機関紙である『学生生活』には、創刊時の高木尚一による「猶太問題」（第一巻第一号、東大文化科学研究会、一九三八年一〇月、一九～二〇頁（『日本主義的学生思想運動資料集成』Ⅰ、柏書房、二〇〇七年、第一巻、二二五～一一六頁。以下、『資料集成』Ⅰと略記）を初めとして、少なからざるユダヤ人問題についての投稿を見ることができる。また、『日本太郎』（『日本主義的学生思想運動資料集成』Ⅱ、柏書房、二〇〇八年、付属ＤＶＤ所収。以下『資料集成』Ⅱと略記）紙上には、田代儀市郎による「思想戦略の確立方策全世界に漲る猶太禍を確認せよ」上・下（昭和一六年七月

三〇日、三一日、一面）「猶太の対日包囲陣」上・下（昭和一六年八月五日、六日、一面）などが掲載されている。日系二世としてのアメリカにおける苦渋の体験を背景にしてユダヤ問題を認識していた菅野にとって、学生協会における同問題の取り扱われ方は決して満足のゆけるものではなかった。後に、菅野が深く関わっていた早大精神科学研究会が警察の圧力により自主解散を余儀無くされると、一九三五年に設立された日本で唯一のユダヤ研究団体であった「国際政経学会」に接近を図ることで学内の学生運動を維持しつつ、彼が最も重要な思想問題であると確信していたユダヤ問題研究を深めて行こうと試みている（本手記三四九～三五六頁）。ちなみに、「国際政経学会」が創設された一九三五年の三月九日に、当時安積中学四年在学中の菅野は、日本におけるユダヤ問題の第一人者で「国際政経学会」の中心になって活動していた四王天延孝陸軍中将による「米国支那の状態」と題した講演を聴講している（「日記抄」五頁）。

（8）軽井沢における野外演習は七月一日から四日のことで、五日より暑中休暇に入っている（「日記抄」二一頁）。

（9）「全日本学生青年比叡山合同合宿」（『資料集成』Ⅱ、第四巻、五一〇～五一二、五一六～五一八頁）、ないし「興亜学生修練会要綱　全日本学生青年比叡山合同合宿」（『資料集成』Ⅱ、第二巻、二八九～二九二頁）のことと思われる。双方とも参加申込書を兼ねるパンフレットで、合宿の目的として「皇国内外の危局打開の重責を負へる全日本学生青年に対し日本精神文化を基礎とせる興亜理念を徹底せしめ、且つは学校報国団に於ける真の推進力を養成せしめんことを期す」と記されている。後者には、「我らは日本歴史に就いて念を深くきはめ、転々不可測の世界状勢に就いて益々判断を正確にし、我らの運動の行く手を見きはめ愈々緊密の協力方途を講じつゝ礼拝と創作と分析批判と綜合統一と、八重波の同じき潮にとけ入る如き多彩にして創造にとめる大精神交流世界を現出し、以て畏き聖旨にこたへ奉らむことを期す。さらば若き諸君、比叡へ来れ、東より西より南より北より。全日本青年学生の憧憬をこゝに集中し表現し成就せむがために我らは一路比叡に向つて進軍を開始する」と結ばれている。なお、同合宿の合宿費は自己負担であったが、各自の学校所在地ないし現住所から合宿地までの旅費の半額が支給されることになっていた。制服制帽着靴ゲートル着用で、携帯用品として洗面具等の他に、岩波文庫版の『明治天皇御製（ママ）集』（宮内省蔵版『明治天皇御集』岩波書店、一九三八年）が指示されていた。

（10）前年の菅平合宿に続き、日本学生協会が実質的に準備、実行した「全日本学生青年比叡山合同合宿」は、大政翼賛会の後援を得た「興亜学生修練会」が主催するという形を取って募集活動が行われていた。注9引用資料、および、小田村寅二郎編『憂国の光と影』国民文化研究会、一九七〇年、一八五頁。占部賢志「小田村事件と日本学生協会の設立」（『資料集成』Ⅱ、第十巻、四四～四五頁）。

（11）同合宿実施に至る経緯と合宿の総括は、「比叡山合宿記録」（南波恕一編「意志の動員　学生運動霊戦史要」）『新指導者』九月号、日本学生協会、一九四一年九月、六八～九

一頁（『資料集成』Ⅰ、第五巻、七八～一〇一頁）に詳細に記録されている。それによれば、七日間にわたる御嶽山合宿は、相見る歓びの日、回顧と前進の日、生の戦ひの日、人生の悲劇の日、宇宙の歓喜の日、決定の日、出陣の日とそれぞれ名づけられていた。なお、日本学生協会は、昭和一六年八月一三日付で合宿の報告書および合宿のテキストを同封した書簡を関係者に送付している（『資料集成』Ⅱ、第二巻、三一八～三二一頁）。

(12) 東大精神科学研究会、日本学生協会の母体である一高昭信会は、昭和八年五月の発足以来、各地で「合宿」を行っている。昭和八年五月には、田所らは東北地方に赴き、福島県下の安積中学、福島中学、福島高商を訪問している。これらの活動は後の合同合宿や、日本全国の高等学校などとの「同信連絡」の道を開くものとなった。彼等が安積中学を訪問した時、菅野武雄は同中学三年在学中であったが、「日記抄」には彼等についての記録は見られない。なお、田所等は七月にも猪苗代湖畔川桁の観音寺で合宿を行っており、一年生の一高昭信会新メンバーで後に運動の中枢を担うことになる夜久正雄、宮脇昌三、南波恕一、小田村寅二郎らが参加したほか、後にそれぞれ慶應義塾大学、早稲田大学内の学生思想団体および、日本学生協会の実働メンバーとして活躍することになる、地元福島の阿部隆一、葛西毅夫らも合流している。小田村寅二郎編『憂国の光と影』四九三頁。

(13) 御嶽山合宿を指導していた精神科学研究所所員は、本部長田所廣泰、総参謀小田村寅二郎、第一隊長房内幸成、第二隊長加納祐五等であった。「比叡山合宿記録」七三頁（『資料集成』Ⅰ、第五巻、八三頁）

(14) 大林善郎。昭和一五年五月の「日本学生協会懇話会名簿」に早稲田大学商学部二年生として名前がみられ（『資料集成』Ⅱ、第二巻、二一九頁）、昭和一五年七月に実施された菅平合同合宿に一般学生として参加し一一班に所属、『進めこのみち』日本学生協会、一九四〇年、五一頁（『資料集成』Ⅱ、第三巻、四一一頁）、その後正大寮に移り、すでに学生協会の学生幹事であった葛西毅夫に次いで、早稲田大学学生として学生協会の運動に積極的に関与する。一九四一年の御嶽山合宿では、第一隊第四班の班長として直接菅野たちの指導にあたる。早稲田大学精神科学研究所代表（『集成』Ⅱ、第五巻、二八四頁）。同年末には、葛西毅夫らとともに徴兵検査を受け、第一種乙合格。「正大寮日誌より」『連絡部報』第一輯第三号、正大寮、一九四一年一二月十五日（『資料集成』Ⅱ、第五巻、五四三頁）。翌年一月一日現在の『精神科学研究所々員名簿』には葛西とともに「助手」として記載されており（『資料集成』Ⅱ、第七巻、二七六～二七七頁）、同年末には「出征同志名簿」（『うたと消息』精神科学研究所、一九四二年一二月八日、二〇頁。『資料集成』Ⅱ、第七巻、三一二頁）中にその名を見ることができる。大林の歌は、正大寮が昭和一六年四月に刊行した歌集『青葉集』（『資料集成』Ⅱ、第五巻、一八六頁）や、昭和一九年八月、早大精神科学研究会発行による『ますらを』一一～一四頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、四三三～四三六頁）に掲載されている。

(15) 額賀強三。東京外国語学校学生。正大寮生。御嶽山合宿では大林善郎班長の下で、菅野が所属した四班の副班長として直接菅野の指導にあたり、菅野の病気療養中には親身になってその面倒を見ている（本手記一二九頁）。正大寮では、研究会「担当者」としてその名があげられている（『資料集成』Ⅱ、第二巻、一三頁）ほか、機関紙『新指導者』の編輯部員としても活動していた。『新指導者』八月号、日本学生協会、一九四一年八月、九六頁（『資料集成』Ⅰ、第四巻、五三六頁）。一九四二年二月三日に世田谷松陰神社で行われた「都下学生運動前進基地出発の宣誓式」で、神田区西神田の前進基地に派遣された。「都下学生運動　進撃の雄叫び」一九四二年二月一六日（『資料集成』Ⅱ、第五巻、六二二頁、六二五～六二六頁）。その後程なく、胸部疾患に罹り療養のため、実家のある日立に戻った。前年末から本宮で静養していた菅野は、新学年開始を控え上京の途次、三月二六日、日立に額賀を見舞っている（本手記一六八～一六九頁）。「［一九四二年三月］二十六日、木、午後一時五十一分本宮発にて、日立に向ふ。加賀兄宅に一泊す。見舞に行く」（「日記抄」二六頁）。額賀の和歌については、日英米開戦の報を受けて開かれた「しきしまのみち」で詠んだ五首が、「連絡部報　第一輯第三号」（『資料集成』Ⅱ、第五巻、五三八頁）に、また、『青葉集』（『資料集成』Ⅱ、第五巻、一八五～一八六頁）、一九四二年四月に刊行された『樛の木集』一四～一五頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、二二〇～二二一頁）にもそれぞれ数首の歌が収録されている。なお、一九四一年六月一四日に文化学院で開催された学生協会の講演会で額賀は演説をおこなったと思われるが、その時の記録にはその演題すら残されていない。『新指導者』七月号、日本学生協会、一九四一年七月、七六頁（『資料集成』Ⅰ、第四巻、四一一頁）。

(16) 一九二九年五月、黒上正一郎の下で一高昭信会を結成。東京帝大法学部卒。高木尚一らの東大精神科学研究会設立を支援し、その学外団体東大文化科学研究会の代表者となる。一九四〇年、日本学生協会を設立し理事長となり、翌年精神科学研究所設立とともにその理事長に就き、終始学生思想運動の中心となって行動した。一九四六年、疎開先の青森県で死去。小田村寅二郎編『憂国の光と影』国民文化研究会、一九七〇年、五～一九、四九一～五〇一頁。小田村寅二郎『昭和史に刻むわれらが道統』三七～四四頁。井上義和『日本主義と東京大学』柏書房、二〇〇八年、一〇二、一一二頁。打越孝明「『学生生活』『新指導者』の執筆者情報」（『資料集成』Ⅰ、第一〇巻、一八八～一八九頁）。

(17) 明治四〇（一九〇七）年、鹿児島県出水市出身。第三高等学校を経て東京帝大文学部独逸文学科卒業。第八高等学校教授時代の一九四〇年に、日本学生協会のメンバーで帝大卒業後府立高等学校に奉職していた高木尚一らとともに、高等学校教育研究会を設立。事務局を引き受け、機関紙『高校教育』の創刊に奔走。同年一〇月の日本学研究所名簿には思想部所員としてその名を見ることができ、日本学生協会機関紙『学生生活』に「教育改革に関する所見」を寄稿している。一九四一年四月には第八高等学校を辞し、二月に設立された精神科学研究所の所員となり、以後、その

中心メンバーの一人として、講演、機関紙『新指導者』への執筆に活躍した。井上義和『日本主義と東京大学』柏書房、二〇〇八年、一三二、一五二頁。「房内幸成教授略歴・研究業績」（『専修法学論集』第二十六号、一九七七年、二一二～二一五頁）。牛垣理「出水高等学校校歌作詞者房内幸成氏について」（出水高等学校ホームページ。）http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Izumi/kiyou/kiyou14/kiyou-kou-kah.htm。「高校教育研究会合宿報告　於奈良」一九四〇年四月（『資料集成』Ⅱ、第二巻、三〇〇～三〇二頁）。『高校教育』創刊号、第二号、一九四〇年（『資料集成』Ⅱ、第二巻、一一一～一四五、一四七～一八八頁）。『学生生活』第三巻第八号、日本学生協会、一九四〇年一〇月（『資料集成』Ⅰ、第三巻、三六四～三六五頁）。打越孝明「『学生生活』『新指導者』の執筆者情報」（『資料集成』Ⅰ、第一〇巻、一九五頁）。

（18）第二節の冒頭からここまで全文が房内による「国史の心髄としきしまの道」の引用とされているが、「国史の心髄としきしまの道」については不詳。

（19）三井甲之『祖国禮拝：詩集』原理日本社、一九二七年、六〇～六三頁（『明治天皇御集』拝誦宣言）

（20）『留魂文鈔　増補再版』日本学生協会、一九四一年一月一日（『資料集成』Ⅱ、第四巻所収）

（21）本文九二ページ冒頭からここまでの文章は、これまで見て来た菅野の文章とはかなり異質であり、他の資料からの引用と思われるが、注記等は見られない。

（22）第三節冒頭からここまでの文章も他の資料からの引用と思われるが、注記等は見られない。

（23）「この歌集の中によみとらるべきである。」という語句が欠落している。

（24）田所廣泰『黒上正一郎先生遺歌集』日本学生協会、一九四〇年、一～四頁（『資料集成』Ⅱ、第三巻、四七五～四七八頁。

（25）田所廣泰『黒上正一郎先生遺歌集』一〇～一一、七二、七四頁（『資料集成』Ⅱ、第三巻、四九〇～四九二、五五二、五五四頁）

（26）田所廣泰『進めこのみち』日本学生協会、一九四〇年、六～八頁（『資料集成』Ⅱ、第三巻、三五六～三五八頁）ちなみに、『進めこのみち』は、一九四〇年七月の菅平合同合宿についての記録で、菅野が参加したのは、翌一九四一年の御嶽山全国合同合宿である。

（27）田所廣泰『進めこのみち』一～五頁（『資料集成』Ⅱ、第三巻、三五一～三五五頁）。四行ほど菅野の意図的と思われる省略が見られる。また、菅野が『進めこのみち』のはしがきから引用している部分は、日本学生協会機関紙の「菅平合同合宿報告」（日本学生協会『学生生活』第三巻第七号、日本学生協会、一九四〇年九月、四〇～五一頁）の四二頁にある合宿の際の班長の活動についての記述と全く同じ文章である。なお、田所は『進めこのみち』の目次裏頁（頁番号なし）で、「本冊子が「学生生活」九月号の合宿記録に照応せらるべきものなることは、読者諸氏に対する最少限度の要請である」と付記している。

（28）打越孝明「日本学生協会の支部活動」（『資料集成』Ⅱ、

第一〇巻、七四頁）。一九三九年九月、早稲田の学生八名によって創設された大学非公認団体。その後も大学の公認を得るべく、数名の教員に会長就任を打診するが成功しなかった。葛西毅夫「早大だより」『学生生活』第二巻第十二号、東大文化科学研究会、一九三九年一二月、五九頁（『資料集成』Ⅰ、第二巻、三七〇頁）。一九四〇年六月リーフレットの配布、日本学生協会による講演会の開催などを経て、会員数は四〇名に増加。菅平合同合宿には、早大から八四校中最大の二四名の参加者があった。「運動の中枢部に働く大学生」たる班長として同大学の葛西毅夫が参加した他、今泉重郎、執行眞普、武藤達哉などの早稲田精神科学研究会の中心メンバーが参加していた。執行眞普「早大だより」『学生生活』第三巻第六号、日本学生協会、一九四〇年八月、三二〜三三頁（『資料集成』Ⅰ、第三巻、二三六〜二三七頁）。「菅平合同合宿報告」、四二、五二頁（『進めこのみち』二九、九八、一〇〇、一〇二頁（『資料集成』Ⅱ、第三巻、三八九、四五八、四六〇、四六二頁）。一九四三年五月、戸塚警察署特高課の取調を受け、「自然消滅との理由を以って」解散を余儀無くされる。本手記、三四九〜三五〇頁。

(29)「改訂文化の戦士」（『資料集成』Ⅱ、第一〇巻、一三五〜一六五頁。「記録映画『文化の戦士』」（『資料集成』Ⅱ、附録ＤＶＤ）

(30) 南波恕一編「意志の動員　学生運動霊戦史要」八〇〜八一頁（『資料集成』Ⅰ、第五巻、九〇〜九一頁）

(31) 不詳

(32) グラーフ・フォン・デュルクハイム伯爵。元国立キール高等師範大学講師、同付属師範学校教授。外務大臣リッベントロップの命により「日本の教育の精神的基盤」調査研究と、在日ドイツ人へのナチズム強化のため一九三八年六月に来日。一九三九年に一時帰国し、翌年再度来日し一九四五年に軽井沢の別荘でアメリカ軍に逮捕されるまで積極的に講演、執筆などの活動を続けた。松下たえ子「カールフリート・デュルクハイムの場合――異文化との出合いと体現をめぐって(1)」（『成蹊大学経済学部論集』二四―一、一九九三年、一〇九〜一一三頁）。『読売新聞』一九三八年一二月一九日朝刊七頁など。御嶽山合宿三日目の午前一〇時半から講演と討論とを行った。南波恕一「意志の動員」七四〜七五頁（『資料集成』Ⅰ、第五巻、八四〜八五頁）。日本学生協会の菅平合宿用テキストとして執筆された蓑田胸喜『世界観の戦ひ』では「デュルクハイム及びクリークの独逸精神論」と題してデュルクハイムが『改造』に寄稿した「欧羅巴精神と独逸精神」に言及し、ヨーロッパの精神文化に注目を促すとともに、「詩人と軍人の人格的統一」「民族的活力と国家形成力との一致」「技術的能力と生ける信仰との融合」がナチスドイツに体現されているという立論を引用している（日本学生協会、一九四〇年、三〜六頁）。ちなみに、蓑田はこの『世界観の戦ひ』に、「ゲルマン神話と現独逸」の章を付加して『ナチス思想批判』（原理日本社、一九四〇年）として刊行している。またこの御嶽山合宿の研究資料として刊行された『自然科学の限界』には、寺田寅彦やポアンカレからの引用に並んで、デュルクハイムの

「独逸の技術的精神の非合理的基礎」の抜粋が掲載されている（日本学生協会正大寮、一九四一年七月、五～七頁。『資料集成』Ⅱ、第四巻、四八七～四八九頁）。

(33)「八月一日の興亜奉公日に原宿駅集合明治神宮参拝及び大饗宴を挙行した。イの一番に参集されたのが早大菅野兄夫れから夫へと燃ゆる想ひで続々参じ「君よ」「待ったよ」と、遠近に挨拶が交された」（「東京通信」『日本太郎』昭和一六年八月一〇日、二面）。

(34)「正大寮誰作るともなしに出来たといふ「再会の歌」が手拍子良敷く高唱され始めた」（前掲「東京通信」）。

(35)「東京の同志の悲痛な感想があると之に対して佐賀、松江、京都の遠方より来られた友達の勇猛なる決意が揚げられた。その折を衝いて桑原、小田村諸大兄の襟を正しめられ話、房内大兄の即席和歌と、今宵夜空に永久の生命を感ずるのであった」（前掲「東京通信」）。

(36)「日記抄」によれば、菅野は七月二六日に御嶽山合宿の四班の仲間と会合を持ち、翌日二七日には既に正大寮を訪ねている。これには、御嶽山合宿で菅野が所属した第四班の班長である正大寮生の大林善郎が関わっていたものと思われる。前年末の早稲田大学精神科学研究会についての報告には、「我らは赤の問題と共に早大新体制の問題を徹底的に批判し我らの信をその中に叩きこませることを決意したのである。それには先ず我ら同志の真の協力がなければならない。我らは同志の緊密なる連絡を為すために正大寮入寮者を獲得せねばならぬことを痛感し（後略）」と記録されており、菅野が正大寮を訪ねたのも、こうした大林等からの働きかけが少なくなかったであろうことが想像できる。『同信旬報　たたかひ』第五号、正大寮、一九四〇年一一月一日（『資料集成』Ⅱ、第五巻、五三四～五三五頁）。こうして、日本学生協会の運動へ強く惹かれていった菅野は、八月一日に予定されていた「再会の日」の前日には、米大使館に赴き米国籍離脱の手続きを行い、「真の日本人になり、自分自身の逃げ道を断ってゆくことになる。参考のために、菅野の合宿参加から国籍離脱までの間の「日記抄」を以下に上げる。

「七月十九日～二四日　武州御嶽山全国合同合宿に参加す。学生協会なるものを始めて知るも、これが余の一生涯に於ける転換期なり。思想的に、学術的に、大いに苦るしむなれど、真の余の進むべき道を□へられる。真に時代を通痛し、志士たらん事を絶叫す。余の一生の思出の山なり。慰霊祭、饗宴の夜には、特に感じさせられた。

二十六日　青山一丁目にて四班の会合を催す。新宿渋谷にて絶叫す。

二十七日　井ノ頭正大寮に行く。

二十八日～三十日　北条、館山に穴石夫人を訪ね、二日間遊ぶ。

三十一日　米大使館に行きて、米国籍離脱の手続きをなす。真の日本人になれり。

八月一日　再会の日、明治神宮前に集合、夜正大寮にて再会の日にて、絶叫し、夕食を共にす」（「日記抄」二二頁）。

(37)「「八月」二日　本宮に帰る。「学術維新」を三日間にて読

破す。八二八頁」（「日記抄」二二頁）。

（38）「八月八日　蝉しぐれしきなる世田ケ谷松陰神社に於て今後の都下における学生運動の推進的中核ともいはるべき都下学生の夏期研究結成式が行はれた（中略）南波局長をかこんで遠く福島から報をうけて飛ぶやうにして来た菅野君や佐賀の百武君など地方の諸兄も列席して語ること約四時間」「東京通信」（『日本太郎』昭和一六年八月一九日、二面）。

（39）小野文雄。一九四一年九月、それまで調査部が担当していた機関紙『新指導者』の編集業務を、編輯局として独立させるに際して、斎藤明局長のもとで局員となる。編輯局「新指導者について」一九四一年九月一二日（『資料集成』Ⅱ、第四巻、五六四頁）。

（40）高木三郎。早稲田大学学生。正大寮に入り、一九四二年一二月の正大寮解散とともに大学近くの集英館に移り、早大精神科学研究会の中心となって活動を続けた。「たゝかひ」最終号、正大寮、一九四二年一二月二〇日（『資料集成』Ⅱ、第五巻、五六七頁）。彼の詠んだ和歌は、『樫の木集』日本学生協会正大寮、一九四二年四月、三二～三三頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、二三八～二三九頁）、『ますらお』二四～三二頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、四四六～四五四頁）などに見る事ができる。

（41）大庭匡。早稲田大学学生。『樫の木集』三三頁。「合宿にて会ふべき友菅野、桑両兄遂に見えざりければ」『ますらを』三三～三八頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、四五五～四六〇頁）。

（42）桑尚彦。早稲田大学学生。「出征にのぞみて詠める」『ますらを』四七頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、四六九頁）。

（43）石川章。國學院大学学生。『樫の木集』二八頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、二三四頁）。

（44）「東京通信」『日本太郎』昭和一六年八月二〇日、二面。

（45）『日本太郎』昭和一六年九月九日、二面。

（46）原文では、「S兄」と匿名になっている。

（47）原文では「吉田兄」。吉田房雄。新潟高等学校卒。東大法学部中退。日本学生協会創立時からの学生幹事の一人として中枢で活動を続ける。新潟での学生思想運動にも積極的に関与し、新潟高等学校信和会の合宿に参加。日本学生協会新潟支部の幹事を兼任する。「日本学生協会関係事項摘要」（『資料集成』Ⅱ、第二巻、一八、二二頁）。『日本学生協会懇話会名簿』三頁（『資料集成』Ⅱ、第二巻、二〇五頁）。『新潟高等学校信和会春季合宿消息』（『資料集成』Ⅱ、第三巻、七五～一〇一頁）。一九四二年末、出征。『うたと消息』二〇頁（『資料集成』Ⅱ、第七巻、三一二頁）。

（48）この当時、菅野は欠字の知識がなかったようで、続く「御製」の上の欠字も省いてしまっている。なお、本手記の後半部分では、欠字を遵守した表記を行うようになっている

（49）『日本太郎』昭和一六年八月三一日、二面

（50）「「八月」二十三日　正大寮に移転す。（三鷹町牟礼四四七―三）連絡部（訓練局）員となる」（「日記抄」二二頁）。

（51）精神科学研究所助手。『精神科学研究所々員名簿』（『資料集成』Ⅱ、第七巻、二七七頁）。一九四二年末、出征。『う

たと消息』二〇頁（『資料集成』Ⅱ、第七巻、三一二頁）。

（52）「［八月］三十一日　肋膜炎との（湿性）医師の診断あり。遂に我は長の病に倒れる身となったのである」（「日記抄」二三頁）。

（53）東京都中野区江古田に昭和一一年結核病院として設立。一九五二年、都内で初の社会福祉法人となる。現武蔵野療園病院。http://www.musashinoryoen.jp/

（54）「九月四日　中野区江古田三丁目、武蔵野療園に入院す。二十二［歳］六［ヶ月］」（「日記抄」二三頁）。

（55）「［九月］精神的、肉体的、家庭的に大に悶ハンし、一時は死を決事あり。あゝかゝる悲痛なる事我れ未だ体験せず。唯涙のみ。微熱三七・八度～三七・五を上下す」（「日記抄」二三頁）。

（56）未確認

（57）精神科学研究所所員、東大文学部、日本学生協会本部長。打越孝明「『学生生活』『新指導者』の執筆者情報」（『資料集成』Ⅰ、第一〇巻、一九二頁）。

（58）「［九月四日］額賀兄奔走し下されし事感謝す」（「日記抄」二三頁）。

（59）葛西毅夫。早稲田大学法学部。早稲田大学における学生協会および早大精神科学研究会による運動の中心となり活動。大学進学以前から一高昭信会の活動とかかわり、一九三三年、同会の猪苗代湖畔観音寺合宿に地元福島から参加（小田村寅二郎編『憂国の光と影』四九三頁）。日本学生協会発足時には学生幹部として参画。『日本学生協会関係事項摘要』（『資料集成』Ⅱ、第二巻、一八頁）、『日本学生協会懇話会名簿』三頁（『資料集成』Ⅱ、第二巻、二〇五頁）。以後、正大寮において『学生生活』の編輯員、「編集後記」『学生生活』第三巻第三号、東大文化科学研究会、一九四〇年五月、六五頁（『資料集成』Ⅰ、第三巻、六九頁）、『日本太郎』主筆としても活躍。「「日本太郎」編輯室より全国同信諸兄へ」一九四一年（『資料集成』Ⅱ、第一〇巻、一七二頁）。地方合宿、合同合宿などの際には班長として直接学生の指導に当たった。「全国学生夏季合宿訓練記録」『学生生活』第二巻第九号、東大文化科学研究会、一九三九年八月、六、一一頁（『資料集成』Ⅰ、第二巻、一一八、一二三頁）。「菅平合同合宿報告」『学生生活』第三巻第七号、四二頁（『資料集成』Ⅰ、第三巻、二八八頁）、「全日本学生思想訓錬合宿記（地方別）」『学生生活』第三巻第八号、日本学生協会、一九四〇年一〇月、四六頁（『資料集成』Ⅰ、第三巻、三七八頁）。一九四一年一二月、徴兵検査により第一乙種合格となる。「正大寮日誌より」「連絡部報」第一輯第三号（『資料集成』Ⅱ、第五巻、五四三頁）、同月一七日の出征学生留魂大会では出征学生の代表として留魂文を朗読。「「出征学生留魂大会」概況」『連絡部報』第一輯第四号、正大寮、一九四一年一二月二〇日（『資料集成』Ⅱ、第五巻、五四八頁）、「出征学生留魂大会開かる」『新指導者』二月号、日本学生協会、一九四二年二月、八二頁（『資料集成』Ⅰ、第六巻、一九八頁）。同じ早稲田出身の大林善郎、今泉重郎、伊藤文一郎とともに、同年末の「出征同志」としてその名が掲載され（「うたと消息』二〇頁。『資料集成』Ⅱ、第七巻、三一二頁）、翌一九四三年一月一日現在で、同期の大林善郎

とともに精神科学研究所助手となっている。『精神科学研究所々員名簿』（『資料集成』Ⅱ、第七巻、二七六頁）。早大精神科学研究会における活動については、葛西自身の筆による「早大だより」『学生生活』第三巻第一号、五八頁（『資料集成』Ⅰ、第二巻、三七〇頁）の他、「早稲田大学大講演会」『新指導者』七月号、七四頁（『資料集成』Ⅰ、第四巻、四〇八頁）など参照。葛西の和歌については、「正大寮主催第一回しきしまのみち会詠草より（一月廿三日）」『学生生活』第三巻第三号、五五頁（『資料集成』Ⅰ、第三巻、五九頁）、「しきしまのみち」『新指導者』九月号、三八頁（『資料集成』Ⅰ、第五巻、一五八頁）、『青葉集』（『資料集成』Ⅱ、第五巻、一六六～一六七頁）、『ますらを』五～一〇頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、四二七～四三二頁）など参照。ちなみに、一九四一年一二月、武蔵野寮園で病気療養中であった菅野は、葛西の出征学生留魂大会における朗読を、ラジオ放送により聴いている（本手記一六二～一六四頁）。

(60) 今泉重郎。早稲田大学商学部。正大寮生。日本学生協会発足時に一般学生として参加。『日本学生協会懇談会名簿』十六頁（『資料集成』Ⅱ、第二巻、二一八頁）。一九四〇年、同じ早稲田大学商学部の大林善郎と共に菅平合宿に参加。『進めこのみち』二九頁（『資料集成』Ⅱ、第三巻、三九〇頁）。「菅平より帰りて　合宿後通信」『学生生活』第三巻第七号、五八～五九頁（『資料集成』Ⅰ、第三巻、三〇四～三〇五頁）。正大寮で寮生活を送りながら、早稲田大学精神科学研究会の活動にも活躍し、一九四一年六月の鶴巻町国民学校で開催された早稲田大学大講演会では、「先陣を承はる今泉兄の火のたまの様な熱烈な熱弁にまづ学生のどぎもを抜」いている。「斯く戦ひ斯く歌へり」『新指導者』七月号、七四頁（『資料集成』Ⅰ、第四巻、四〇八頁）。彼の和歌は、「合宿歌集無窮の戦ひ」『進めこのみち』一〇〇頁（『資料集成』Ⅱ、第三巻、四六〇頁）。『青葉集』（『資料集成』Ⅱ、第五巻、一七七頁）。「しきしまのみち」『新指導者』六月号、日本学生協会、一九四一年六月、五七～五八頁（『資料集成』Ⅰ、第四巻、二八五～二八六頁）。「シキシマノミチ」『日本太郎』一九四一年一〇月二二日二面。『ますらを』、一五～一六頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、四三七～四三八頁）。一九四一年一二月四日、同じ早稲田大学の正大寮生、葛西毅夫、大林善郎とともに第一乙種合格。「正大寮日誌より」『連絡部報』第一輯第三号（『資料集成』Ⅱ、第五巻、五四三頁）。翌年末には、葛西、大林とともに「出征同志名簿」『うたと消息』二〇頁（『資料集成』Ⅱ、第七巻、三一二頁）にその名前が見られる。

(61) 津野栄助。安積中学五一期生。一九四一年四月に菅野と共に桑野寮に入寮している。「［一九四一年四月］二〇日、桑野寮（中野区新井町二五五番地）に移る。二五日、新寮生歓迎会あり。佐藤惣一郎、津野、並に余」（「日記抄」二一頁）。『東京桑野寮誌』二～四頁。「［九月］九日　津野兄来らる」「十二日、熊田、阿部、エビラ［簏］兄来らる」（「日記抄」二三頁）。

(62) 安武昇（弘益）。一高中退。日本学生協会幹事。精神科学研究所嘱託。機関紙等への投稿はほとんど和歌、長詩に限られ、「通信文」程度の記述以外にまとまった思想関係の記

事は見ることができない。彼の創作については、「故北白川宮永久王殿下奉悼歌」『学生生活』第三巻第七号、一一頁（『資料集成』Ⅰ、第三巻、二五七頁）。「しきしまのみち会第三回」日本学研究所・正大寮、一九四〇年一〇月（『資料集成』Ⅱ、第五巻、五六九～五七〇頁）。「『みたて』創刊号に寄する歌」『御楯』創刊号、日本学生協会近畿支部、一九四一年一月、二頁（『資料集成』Ⅱ、第六巻、三三〇頁）。「しきしまのみち」『御楯句報』第四号、大阪正大寮、一九四一年一月、一葉（『資料集成』Ⅱ、第六巻、四二〇頁）。「しきしまのみち」『地熱』第二巻第一号、日本学生協会東北支部、一九四一年二月、四頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、二九〇頁）。「長詩」『地熱』第二巻第二号、一九四一年三月、三頁（『資料集成』Ⅱ、第五巻、二九三頁）。「しきしまのみち」『思想界』八月号、一九四三年七月、三〇頁（『資料集成』Ⅰ、第九巻、三四六頁）などが見られる。また、彼の組織上の位置については、『日本学生協会関係事項摘要』二葉（『資料集成』Ⅱ、第二巻、一八頁）。『日本学生協会懇話会名簿』一頁（『資料集成』Ⅱ、第二巻、二〇三頁）。『精神科学研究所々員名簿』（『資料集成』Ⅱ、第七巻、二七五頁）など参照のこと。なお、「正大寮だより」『学生生活』第三巻第八号、五五頁（『資料集成』Ⅰ、第三巻、三九七頁）に掲載されている正大寮前の集合写真に彼の姿を見ることができるほか、「斯く戦ひ斯く歌へり」『新指導者』七月号、七〇～七一頁（『資料集成』Ⅰ、第四巻、四〇四～四〇五頁）、「帰依の詩」『新指導者』一一月号、一九四一年一一月、七〇頁（『資料集成』Ⅰ、第五巻、二九六頁）「昭和一八年一月廿日（水）第一回所員会議」（『資料集成』Ⅱ、第七巻、三四六頁）などに安武の動静が記録されている。菅野は入院の当日に初めて安武と会っている。「［九月四日］安武大兄を紹介さる」（「日記抄」二三頁）。

(63)『教行信証』行巻、岩波文庫版九九頁。

(64)『臨済録』、岩波文庫版、一九八九年、五〇～五一頁。

(65)「東京通信」『日本太郎』昭和一六年一〇月二一日、二面。なお、本文に続けて「筆者紹介」として「筆者は正大寮生、現在中野区江古田街三ノ一一九八武蔵野療園にて病ひの身を療養して居られます。右は菅野兄より田所大兄への書簡より抜粋したものです」と記されている。

(66)「［九月］十日、国分のオバ様、国分籾夫氏来らる」「［一一月］十四～十六日、国分のオバ様上京せらる。並に姉タカ子さん来らる」「［一一月］二十九日、国分のオバ様上京せらる」（「日記抄」二三～二四頁）。

(67)『資料集成』Ⅱ、第七巻、二六一～二六三頁。

(68) 加納祐五編『思想戦戦闘綱要』精神科学研究所、一九四一年一〇月一七日（『資料集成』Ⅱ、第七巻、三二四～三二四頁）。